

# 美しい村

堀辰雄

青空文庫





天の灑こうき気の薄うす明あかりに優やさしく会えしやく積くをしようとして、  
命の脈またが又また新しく活かつぱつ澆じょうに打うっている。

こら。下界。お前はゆうべも職むなしゆを曠むなしゆうしなかつた。

そしてけさ疲つかれが直ただつて、己おれの足の下で息いきをしている。

もう快樂もつを以もつて己おれを取り巻まきはじめる。

断たえず最高たの存在たへと志たぎして、

力ちから強い決心ちからを働たかせているなあ。





## 序曲

六月十日 K：村にて

御無沙汰をいたしました。今月の初めから僕は当地に滞在しております。前からよく僕は、こんな初夏に、一度、この高原の村に来てみたいものだと言っていました。前からよくと今度、その宿望がかなった訣です。まだ誰も来ていないので、淋しいことはそりあ淋しいけれど、毎日、気持のよい朝夕を送っています。

しかし淋しいとは言つても、三年前でしたか、僕が病気をして十月ごろまでずっと一人で滞在していたことがありましたね、あの時のような山の中の秋ぐちの淋しさとはまるで違ふように思えます。あときは籐のステッキにすぎるようにして、宿屋の裏の山径などへ散歩に行くと、一日毎に、そこいらを埋めている落葉の量が増える一方で、それらの落葉の間からはときどき無気味な色をした茸がちらりと覗いていたり、或はその上を赤腹（あのなんだか人を莫迦にしたような小鳥です）なんぞがいかにも横着そうに飛びまわっているきりで、ほとんど人気は無いのですが、それでいて何だかそこら中に、人々の立去

つた跡あとにいつまでも漂ただよっている一種のにおいのようなもの、——ことにその年の夏が一きわ花やかで美しかっただけ、それだけその季節の過ぎてからの何とも言えぬ侘わびしさのよくなものが、いわば凋ちようらく落の感じのようなものが、僕自身が病後だったせいか、一層ひしひしと感ぜられてならなかったのですが、（——もつとも西洋人はまだかなり残っていたようです。ごく稀まれにそんな山径で行き逢あいますと、なんだか病やみ上がりの僕の方を胡散うさんくさそうに見て通り過ぎましたが、それは僕に人なつかしい思いをさせるよりも、かえってへんな侘わびしさをつのらせました……）——そんな侘わびしさがこの六月の高原にはまるで無いことが何よりも僕は好きです。どんな人気のない山径を歩いていても、一草一木ごととく生き生きとして、もうすっかり夏の用意ができ、その季節の来るのを待っているばかりだと言った感じがみなぎっています。山やまうぐいす鶯うぐいすだの、閑古鳥かんこどりだのの元気よく囀さえずることといったら！ すこし僕は考えごとがあるんだから黙だまっていてくれないかなあ、と癩か癩んしゃくを起したくなる位です。

西洋人はもうぽつぽつと来ているようですが、まだ別荘などは大たいがいとせ概閉とせされています。その閉されているのをいいことにして、それにすこし山の上の方だと誰ひとりそこいらを通りすぎるものもないので、僕は気に入った恰かつこう好こうの別荘があるのを見つけると、構わず



その庭園の中へはいつて行つて、そのヴェランダに腰を下ろし、煙草などをふかしながら、ぼんやり二三時間考えごとをしたりします。たとえば、木の皮葺きのバンガロオ、雑草の生い茂つた庭、藤棚（その花がいま丁度見事に咲いています）のあるヴェランダ、そこから一帯に見下ろせる樅や落葉松の林、その林の向うに見えるアルプスの山々、そういったものを背景にして、一篇の小説を構想したりなんかしているんです。なかなか好い気持です。ただ、すこしぼんやりしていると、まだ生れたての小さな蝸が僕の足を襲つたり、毛虫が僕の帽子に落ちて来たりするので閉口です。しかし、そういうものも僕には自然の僕に対する敵意のようなものとしては考えられません。むしろ自然が僕に対してうるさいほどの好意を持つているような気さえします。僕の足もとになど、よく小さな葉っぱが海苔巻のように巻かれたまま落ちていますが、そのなかには芋虫の幼虫が包まれているんだと思うと、ちよつとぞつとします。けれども、こんな海苔巻のようなものが夏になると、あの透明な翅をした蛾になるのかと想像すると、なんだか可愛らしい気もしないことはありません。

どこへ行つても野薔薇がまだ小さな硬い白い蕾をつけています。その咲くのが待ち遠しくてなりません。これがこれから咲き乱れて、いいにおいをさせて、それからそれが散

るころ、やつと避暑客たちが入り込んでくることでしょう。こういう夏場だけ人の集まってくる高原の、その季節に先立って花をさかせ、そしてその美しい花を誰にも見られずに散って行ってしまうさまざまな花（たとえばこれから咲こうとする野薔薇もそうだし、どこへ行つても今を盛りに咲いている躑躅もそうですが）——そういう人馴れない、いかにも野生の花らしい花を、これから僕ひとりきりで思う存分に愛玩しようという気持は（何故なら村の人々はいま夏場の用意に忙しくて、そんな花などを見てはいられませんから）何ともいえずに爽やかで幸福です。どうぞ、都会にいたたまれないでこんな田舎暮らしをするようなことになっていく僕を不幸だとばかりお考えなさらぬで下さい。

あなた方は何時頃こちらへいらつしやいますか？ 僕はほとんど毎日のようにあなたの別荘の前を通ります。通りすがりにちよつとお庭へはいつてあちらこちらを歩きまわることもあります。昔はあんなに草深かったのに、すっかり見ちがえる位、綺麗な芝生になってしまいましたね。それに白い柵などをおつくりになったりして。……何んだかあなたの別荘のお庭へはいつても、まるで他の別荘の庭へはいつていような気がします。人に見つけられはしないかと、心臓がどきどきして来てなりません。どうしてこんな風にお変えになってしまったのか、本当におうらめしく思います。ただ、あなたと其処でよくお話し

たことのあるヴェランダだけは、そっくり昔のままですけれど……

ああ、また、僕はなんだか悲しそうな様子をしてしまった。しかし、僕は本当はそんなに悲しくはないんですよ。だって僕は、あなた方さえ知らないような生の愉悅を、こんな山の中で人知れず味あじわっているんですもの。でも一体、何時ごろあなた方はこちらへいらっしやるのかしら？ あなた方とはじめて知り合いになったこの土地で、あなた方ともう見知らない人同志のように顔を合せたりするのは、大へんつらいから、僕はあなた方のいらっしやる前に、この村を出発しようかと思えます。どうぞその日の来るまで僕にも此処ここにいることを、そしてときどき誰も見ていないとき、あなたの別荘のお庭をぶらつくことをお許し下さい。

またしても、何と悲しそうな様子をするんだ！ もう、止よめます。しかし、もうすこし書かせて下さい。でも、何を書いたものかしら？ 僕のいま起居しているのはこの宿屋の奥おくの離れはなです。御存知ごぞんじでしょう？ あそこを一人で占せんり領りょうしています。縁側えんがわから見上げると、丁度、母屋おもやの藤棚が真向うに見えます。さつきもいったように、その花がいま咲き切っているんです。が、もう盛りもすぎたと見え、今日あたりは、風もないのにぼたぼたと散りこぼれています。その花に群がる蜜蜂みつばちといったら大したものです。ぶんぶん

んぶん唸うなっています。この手紙を書きながら、ちよつと筆を休めて、何を書こうかなと思つて、その藤の花を見上げながらぼんやりしていると、なんだか自分の頭の中の混乱と、その蜜蜂のうなりとが、ごつちやになつて、そのぶんぶんいつているのが自分の頭の中ではないかしら、とそんな気がしてくる位です。僕の机の上には、マダム・ド・ラファイエツトの「クレエヴ 公 爵 夫人」が読みかけのまんま頁ページをひらいています。はじめてこのフランスの古い小説をしみじみ読んでいますが、そのお蔭かげでだいぶ僕も今日このごろの自分の妙みょうに切迫せつぱくした気持から救われているような気がしています。この小説についてはあなたに一番その読後感をお書きしたいし、また黙つてもいたい。二三年前、あなたに無理矢理にお読ませした、ラジイゲの「舞踏会ぶとうかい」は、この小説をお手本にしたと言われている位ですから、まあ、あれに大へん似ています。しかし「舞踏会」のときは、まだあなたにこだわらずに、その本をお貸しが出来たけれど、そしてそれをお読みになつてもあなたは何もおつしやらなかつたし、僕もそれについては何もお訊ききしなかつたが、それでも或ある気持はお互たがいに通じ合つていたようでしたけれど、いま僕は、あの時のようにこだわらずに、この小説の読後感をあなたにお書きできるかしら？

第一、この手紙にしたつて、筆をとりながら、果してあなたに出せるものやら、出せそ

うもないものやら、心の中では躊躇ためらっているのです。恐おそらく出さずにしまうかも知れませ  
ん。……こんなことを考え出したら、もうこの手紙を書き続ける気がしなくなりまし  
た。  
もう筆を置きます。出すか出さないか分かりませんが、ともかくも左様さようなら。

## 美しい村

或は 小遁走曲  
フウグ

或る小高い丘おかの頂きにあるお天狗様てんぐのところまで登ってみようと思つて、私は、去年の落葉ですつかり地肌じはだの見えないほど埋まつているやや急な山径やまみちをガサガサと音させながら上つて行つたが、だんだんその落葉の量が増して行つて、私の靴くつがその中に気味悪くらい深く入るようになり、腐くさつた葉の湿り気しめけがその靴のなかまで滲しみ込んで来そうに思えたので、私はよつほどそのまま引つ返そうかと思つた時分になつて、雑木林ぞうきばやしの中からその見棄みすてられた家が不意に私の目の前に立ち現れたのであつた。そうしてその窓がすつかり釘づけくぎになつていて、その庭なんぞもすつかり荒れ果あて、いまにも壊れこわれそうな木戸が半ば開かれたままになつてゐるのを認めると、私は子供らしい好奇心こうきしんで一ぱいになりなが

らその庭の中へずかずかと這入<sup>はい</sup>って行った。

そうして一めん<sup>いめん</sup>に生い茂<sup>さか</sup>った雑草を踏み分けて行くうちに、この家のこうした光景は、数年前、最後にこれを見た時とそれが少しも変わっていないような気がした。が、それが私の奇妙な錯覚<sup>さつかく</sup>であることを、やがて私のうちに蘇<sup>よみがえ</sup>って来たその頃の記憶<sup>きおく</sup>が明瞭<sup>めいりょう</sup>にさせた。今はこんなにも雑草が生い茂<sup>さか</sup>って殆<sup>ほと</sup>んど周囲の雑木林と区別がつかない位にまでなつてしまつているこの庭も、その頃は、もつと庭らしく小綺麗になつていたことを、漸<sup>ようや</sup>く私は思い出したのである。そうしてつい今しがたの私の奇妙な錯覚は、その時から既<sup>すで</sup>に経過してしまつた数年の間、若<sup>も</sup>しそれがそのままに打棄<sup>うちちや</sup>られてあつたならば、恐らくはこんな具合<sup>ぐあい</sup>にもなつていであろうに……という私の感じの方が、その当時の記憶が私に蘇<sup>よみがえ</sup>るよりも先きに、私に到着したからにちがひなかつた。しかし、私のそういう性急<sup>せつかち</sup>な印象が必ずしも贗<sup>にせ</sup>ではなかつたことを、まるでそれ自身裏書きでもするかのよう<sup>よう</sup>に、私のまわりには、この庭を一面に掩<sup>おほ</sup>うて草木が生い茂るがままに生い茂つているのであつた。

そのこのヴェランダにはじめて立つた私は、錯雑した樅<sup>もみ</sup>の枝を透して、すぐ自分の眼下に、高原全帯が大きな円を描<sup>えが</sup>きながら、そしてここかしこに赤い屋根だの草屋根だのを散らばらせながら、横<sup>よこた</sup>わつているのを見下ろすことが出来た。そうしてその高原の尽<sup>つ</sup>きるあたり

から、又、他のいくつもの丘が私に直面しながら緩やかに起伏していた。それらの丘のさらに向うには、遠くの中央アルプスらしい山脈が青空に幽かに爪でつけたような線を引いていた。そしてそれが私のきざきざな地平線をなしているのだった。

夏毎にこの高原に来ていた数年前のこと、これと殆どそっくりな眺望を楽しむために、私は屢々、ここからもう少し上方にあるお天狗様まで登りに来たのだけれど、その度に、この最後の家の前を通り過ぎながら、そこに毎夏のようにいつも同じ二人の老嬢が住まっているのを何んとなく気づかわしげに見やっては、その二人暮らしに私はひそかに心をそそられたものだった。——だが、あれはひよつとすると私自身の悲しみを通してばかり見ていたせいかも知れないぞ？（と私は考えるのだった。）何故って、私がこの丘へ登りに来た時は、いつも私に何か悲しいことがあって、それを肉体の疲労と取り換えたためだったからな。真白な名札が立って、それにはMISSのついた苗字が二つ書いてあったつけ。……そう、その一方が確かMISS SEYMOREという名前だったのを私は今でも覚えている。が、もう一方のは忘れた。そうしてその老嬢たちそのものも、その一方だけは、あの銀色の毛髪をして、何となく子供供した顔をしていただけは、今でも私の眼にはつきりと浮んでくるけれど、もう一方のはどうしても思い出せない。昔から自



分の氣に入った型タイプの人物にしか関心しようとしないう自分の習癖しゅうへきが、（この頃ではどうもそれが自分の作家としての大きな才能の欠陥けつかんのように思われてならないのだけれど、）この老嬢たちにも知らず識らずしの裡うちに働いていたものと見える。

……この数年間というもの、この高原、この私の少年時の幸福な思い出と言えばその殆んど全部が此処ここに結びつけられているような高原から、私を引き離していた私の孤独こどくな病院生活、その間に起つたさまざまな出来事、忘れたい人々との心にもない別離べつり、その間の私の完全な無為むい。……そして、その長い間放擲ほうてきしていた私の仕事を再び取り上げるために、一人きりにはなりたいたし、そうかと言ってあんまり知らない田舎いなかへなぞ行つたら淋しくてしようがあるまいからと言つた、例の私の不決断しやうぶんな性分しやうぶんから、この土地ならそのすべてのものが私にさまざまな思い出を語ってくれるだろうし、そして今時分ならまだ誰にも知つた人には会わないだろうしと思つて、こんな季節はずれの六月の月を選んで、この高原へわざわざ私はやつて来たのであつた。が、数日前にこの土地へ到着してから私の見聞きする、あたかも私のそういう長い不在を具象ぐしやうするような、この高原に於おけるさまざまな思いがけない変化、それにつけても今更いまさらのように蘇おぼつて来る、この土地ではじめて知り合いになつた或る女友達との最近の悲しい別離。……

そんな物思いに耽りながら、私はぼんやり煙草を吹かしたまま、ほとんど私の真正面の丘の上に聳えている、西洋人が「巨人の椅子」という綽名をつけているところの大きな岩、それだけがあらゆる風化作用から逃れて昔からそっくりそのままに残っているかに見える、どつしりと落着いた岩を、いつまでも見まもっていた。

私はやがて再び枯葉をガサガサと音させながら、山径を村の方へと下りて行った。その山径に沿うて、落葉松などの間にちらほらと見える幾つかのバンガロオも大概はまだ同じような紅殻板を釘づけにされたままだった。ときおり人夫等がその庭の中で草むしりをしていた。彼等の中には熊手を動かしていた手を休めて私の方を胡散臭そうに見送る者もあった。私はそういう氣づまりな視線から逃れるために何度も道もないようなところへ踏み込んだ。しかしそれは昔私の大好きだった水車場のほとりを目ざして進んでいた私の方向をどうにかこうにか誤らせないでいた。しかし其処まで出ることは出られたが、数年前まで其処にごとごとと音立てながら廻っていた古い水車はもう跡方もなくなっていた。それよりももつと悲しい氣持になつて私の見出したのは、その水車場近くの落葉松を背にした一つのヴィラだった。私の屢しば訪れたところのそのヴィラは、数年前に最後に私の見た時とはすっかり打つて變つていた。以前はただ小さな灌木の茂みで無雑作に縁どら

れていたその庭園は、今は白い柵できちんと区限くぎられていた。私はふと何故なぜだか分らずにその滑なめらかな柵をいじくろうとして手をさし伸のべたが、それにはちよつと触ふれただけであつた。そのとき私の帽子の上になんだか雨滴あめのようなものがぼたりと落ちて来たから。そこでその宙に浮いた手を私はそのまま帽子の上を持つて行つた。それは小さな桜さくらの実であつた。私がひよいと頭を持ち上げた途端に、そこには、丁度私の頭上に枝えだを大きく拈ひろげながら、それがあんまり高いので却かえつて私に気づかれずにいた、それだけが私にとっては昔馴染なしみの桜の老樹が見上げられた。

やがて向うの灌木の中から背の高い若い外国婦人が乳母車うばぐるまを押しながら私の方へ近づいて来るのを私は認めた。私はちつともその人に見覚えがないように思った。私がその道ばたの大きな桜の木に身を寄せて道をあけていると、乳母車の中から亜麻色あまいろの毛髪をした女の児こが私の顔を見てにつこりとした。私もつい釣つり込まれて、につこりとした。が、乳母車を押していたその若い母は私の方へは見向きもしないで、私の前を通り過ぎて行つた。それを見送つているうち、ふとその鋭すどい横顔から何んだか自分も見ることがあるらしいその女の若い娘むすめだつた頃の面影おもかげが透すかしのように浮んで来そうになつた。

私はその白い柵のあるヴィラを離れた。私の帽子の上に不意に落ちて来た桜の実が私の

うちに形づくり、拵げかけていた悲しい感情の波紋を、今しがたの気づまりな出会がすっかり掻き乱してしまつたのを好い機会にして。

私は村はずれの宿屋に帰つて来た。私とその宿屋に滞在する度にいつも私にあてがわれる離れの一室。同じように黒ずんだ壁、同じような窓枠、その古い額縁の中にはいつて来る同じような庭、同じような植込み、……ただそれらの植込みに私の知つてゐる花や私の知らない花が簇がり咲いてゐるのが私には見馴れなかつた。それはそれでまた私を侘びしがらせた。母屋の藤棚から、風の吹くごとに私のところまでその花の匂がして来た。その藤棚の下では村の子供たちが輪になつて遊んでゐた。私はその子供たちの中に昔よく遊んでやつたことのある宿屋の子供がゐるのを認めた。そのうちに他の子供たちは去つた。そしてその子供だけがまだ地面に跼んだまま一人で何かして遊んでゐた。私はその子の名前を呼んだ。その子はしかし私の方を振り向こうともしなかつた。それほど自分の遊びに夢中になつてゐるように見えた。私がもう一度その名前を呼ぶと、やつとその子はうす汚れた顔を上げながら私に言った。「太郎ちゃんは何処にゐるか知らないよ」——私はその時初めてその小さな子供は私の呼んだ男の子の弟であるのに気がついたので。しかし何という同じような顔、同じような眼差、同じような声。……暫らくしてから「次

郎！ 次郎！」と呼びながら、一人の、ずっと大きな、見知らない男の子が庭へ這入<sup>はい</sup>つて来るのを私は見た。ようやく私になつて私の方へ近づいて来そうになつたその小さな弟は、それを聞くと急いでその方へ駈<sup>か</sup>けて行つてしまつた。私の方では、その大きな見知らないような男の子が昔私と遊んだことのある子供であることを漸<sup>や</sup>つと認め出していた。しかし、その生意気さかりの男の子は小さな弟を連れ去りながら、私の方をば振り向こうともしなかつた。

私は毎日のように、そのどんな隅<sup>すみ</sup>々までもよく知っている筈<sup>はず</sup>だつた村のさまじまな方へ散歩をしに行つた。しかし何処へ行つても、何物かが附<sup>つけ</sup>加<sup>くわ</sup>えられ、何物かが欠けているように私には見えた。その癖<sup>くせ</sup>、どの道の上でも、私の見たことのない新しい別荘<sup>かけ</sup>の蔭<sup>かげ</sup>に一むれの灌木が、私の忘れていた少年時の一部分のように、私を待ち伏<sup>ぶ</sup>せていた。そうしてそれらの一むれの灌木そっくりにこんがらかつたまま、それらの少年時の愉<sup>たの</sup>しい思い出も、悲しい思い出も私に蘇<sup>よみが</sup>つて来るのだった。私はそれらの思い出に、或<sup>ある</sup>は胸をしめつけ

られたり、或は胸をふくらませたりしながら歩いてきた。私は突然立ち止まる。自分があんまり村の遠くまで来すぎてしまっているのに気がついて。——そんなみちみち私の出会うのは、ごく稀には散歩中の西洋人たちもいたが、大概、枯枝を背負つてくる老人だとか蕨どりの帰りらしい籃を腕にぶらさげた娘たちばかりだった。それ等のものはしかし、私にとってはその村の風景のなかに完全に雑り込んで見えるので、少しも私のそういう思ひ出を邪魔しなかつた。もつとも時たま、或る時は私があんまり子供らしい思ひ出し笑ひをしているのを見て、すれちがいざまいきなり私に声をかけて私を愕かせたり、又或る時は向うから私に微笑みかけようとして私の悲しげな顔を見てそれを途中で止めてしまうようなこともあるにはあつたが……。

そんな風に思ひ出に導かれるままに、村をそんな遠くの方まで知らず識らず歩いて来てしまった私は、今更のように自分も健康になつたものだなあ、と思つた。私はそういう長い散歩によつて一層生き生きした呼吸をしている自分自身を見出した。それにこの土地に滞在してからまだ一週間かそこいらにしかならないけれど、この高原の初夏の氣候が早くも私の肉体の上にも精神の上にも或る影響を与え出していることは否めなかつた。夏はもう何処にでも見つけられるが、それでいてまだ何処という的もないでいると言つたよ

うな自然の中を、こうしてさ迷いながら、あちこちの灌木の枝には注意さえすれば無数の  
 荅つぼみが認められ、それ等はやがて咲き出すだろうが、しかしそれ等は真夏の季節シーズンの来ない  
 前に散ってしまうような種類の花ばかりなので、それ等の咲き揃そろうのを楽しむのは私一人  
 だけであろうと言う想像なんかをしていると、それはこんな淋さびしい田舎暮いなかぐらしのような高価  
 な犠ぎ牲せいを払はらうだけの値あたいは十分にあると言つていいほどの、人知れぬ悦えつ楽らくのように思われ  
 てくるのだつた。そうして私はいつしか「田園交響曲でんえんこうきやうきよく」の第一楽章が人々に与える  
 快こころよい感動こころよに似たもので心を一ぱいにさせていた。そうして都会にいた頃の私はあんまり自  
 分のぼんやりした不幸を誇こちよう張ちやうし過ぎて考えていたのではないかと疑い出したほどだつた。  
 こんなことなら何もあんなにまで苦しまなくともよかつたのだと私は思いもした。そうし  
 て最近私を苦しめていた恋れんあい愛あい事件じけんをそっくりそのままに書いてみたら、その苦しみその  
 ものにも気に入るだろうし、私にはまだよく解わからずにいる相手の気持もいくらか明瞭はつきりしは  
 しないかと思つて、却かえつてそういう私自身の不幸をあてにして仕事をしに來た私は、ため  
 に困こんわく惑わくしたほどであつた。私はてんでもうそんなものを取り上げてみようという気持す  
 らなくなつてしまつたのだ。で、私は仕事の方はそのまま打うち棄ちらかして、毎日のように  
 散歩ばかりしていた。そうして私は私の散歩区域ひびとを日毎ひごとに拈ひげて行つた。

或る日私がそんな散歩から帰って来ると、庭掃除にわそうじをしていた宿の爺じいやに呼び止められた。

「細木さんはいつ頃こちらへお見えになりますか？」

「さあ、僕ぼく、知らないけれど……」

それは私が何日頃この地を出発するかを聞いたのと同じことであるのに爺じいやは気づきようがなかったのだ。

「去年お帰りになるとき」と爺じいやは思い出したように言った。「庭へ羊齒しだを植えて置くよ」と言われたんですが、何処へ植えろとおっしゃったんだか、すっかり忘れてしまいましたもんで……」

「羊齒おうむをね」私は鸚鵡おうむがえしに言った。それから私は例の白い柵さくに取り囲まれたヴィラを頭に浮べながら、「あの白い柵はいつ出来たの？」と訊きいた。

「あれですか……あれは一昨年でした」

「一昨年ね……」

私はそれつきり黙だまっていた。爺じいやのいじくっている植木の一つへ目をやりながら。それ



からやつとそれに白い花らしいものの咲いているのに気がつきながら訊いた。

「それは何の花だい？」

「これはシヤクナゲです」

「シヤクナゲ？　ふうん、そう言えば、じいやさん、このへんの野薔薇のばらはいつごろ咲くの？」

「今月の末から、まあ、来月の初めにかけてでしような」

「そうかい、まだ大ぶあるんだね。——一体、どのへんが多いんだい？」

「さあ……あのレエノルズさんの病院の向うなんか……」

「ああ、じゃ、あそこかな、あの絵葉書にあつた奴やつは。……」

その翌朝は、霧きりがひどく巻いていた。私はレエンコートをひっかけて、まだ釘づけにされてる教会の前を通り、その裏の椽とちの林の中を横切つて行つた。その林を突き抜けると、道は大きく曲りながら一つの小さな流れに沿うて行つた。しかしその朝はその流れは霧のためにちつとも見えなかつた。そしてただ、せせらぎの音ばかりが絶えず聞えていた。私はやがて小さな木橋を渡つた。それからその土手道どてみちは、こんどは今までとは反対の側を、

その流れに沿うて行くのであった。さて、その土手道へ差しかかろうとした途端、私はふと立ち止まった。私の行く手に何者かが異様な恰好かつこうでうずくまっているのが仄見ほのみえたので。その異様なものは、霧のなかで私自身から円光のように発しているかに見える、私を中心にして描いた円状の薄明りうすあかの、丁度その円周の上にうずくまっているのだった。しかし霧は絶えず流れているので、或る時は一層濃こいのが来てその人影ひとかげをほとんど見えなくさせるが、やがてそれが薄らいで行くにつれてその人影も次第にはつきりしてくる。漸つとそれが蝙蝠傘ことうもりがさの下で、或る小さな灌木かんぼくの上に気づかわしげに身を踞こじめている、西洋人らしいことが私には分かり出した。もつと霧が薄らいだとき、私はその人の見まもっているのが私の見たいと思っていた野薔薇の木らしいことまで分かった。向うでは私のことに気づかないらしかった。そのため、誰だれにも見られていないと信じながら何かに夢中になつてゐる時、ややもすると、あとでそれを思い出そうとしても思い出せないような変になつたつかしい姿勢をしていることがあるものだが、私の行く手を塞ふさいでいるその人も恐おそらくそんな時の姿勢をしているのにちがひなかつた。……気がついて見ると私のすぐ傍かたわらにもあつた野薔薇の木を、それが私の見たいと思つてゐる野薔薇の木のほんのデッサンでしかないように見やりながら、私はそのままじつと佇たたずんでいた。——やつとその人影は身を起し、

蝙蝠傘をちよつと持ちかえてから歩き出した。そうしてずんずん霧のなかに暈ぼやけて行つた。私も歩き出しながら、やつとその野薔薇の小さな茂しげみの前に達した。そうして今しがたその人のしていたような難むづかしい姿勢を真ま似ながら、その上に身を踞こためてみた。そうすればその人の心の状態までが見透みすかされでもするかのよう。その小さな茂みはまだ硬かたい小さな荅つぼみを一ぱいにつけながら、何か私に訴うつたでもしたような眼つきで私を見上げた。私は知らず識しらずの裡うちにそれらの荅を根気よく数えたり、そつと持ち上げてみたりしている自分自身に気がついた。ふとさつきの人のしていた異様な手つきがまざまざと蘇よみがえつた。そうしてその小さな茂みがマイ・ミクスチュアらしい香かおりを漂ただよわせているのに気がついたのもそれと殆ほとんど同時だった。湿しめつた空気のために何時いつまでもそのこんがらかつた枝にからみついて消えずにいるその香りは、まるでその小さな茂みそのものから発せられているかのように思われた。——私はいつもパイプを口から離はなしたことはないレエノルズさんのことを思い出した。そして今の人影はその老医師にちがいないと思つた。そう言えば、さつきから向うの方に霧のために見えたり隠かくれたりしている赤茶けたものは、そのサナトリウムの建物らしかった。

私は再び霧のなかの道を、神こうじょう々しいような薄光りに包まれながら、いくら歩いてもち

つとも自分の体が進まないようなもどかしさを感じながら、あてもなく歩き続けていた。私の心はさつき霧の中から私を訴えるような眼つきで見上げた野薔薇のことで一杯いっぱいになっていた。私はそれらの白い小さな花を私の詩のためにさんざん使って置きながら、今日までその本物をろくすつぽ見もしなかったけれど、今度こそ、私もそれらの花に対して私のありつただけの誠実を示すことの出来る機会の来つつあることを心から喜んでいた。そしてそのための私の欲よろこばしさと言ったら、昔むかしの詩人等が野薔薇のために歌った詩句を、口ずさむなんと言うのではなく、それを知っているだけ残らず大きな声で唖どな鳴り散らしたいような衝しょう動どうにまで、私を駈かり立てるのであった。

私の書こうとしていた小説の主題は、漸ようやくその日その日を楽しむことが出来るようになったこんな田舎暮いなかぐらしの中では、いよいよ無意味なものに思われて来た。それに、そんなものを書くことは、自分で自分を一層どうしようもない破目はめに陥おとし入れるようなものであることにも気がついたのだ。「アドルフ」の例が考えられた。ああいうものにまで私は自分

の小さな出来事を引き揚げたかったのだ。弱気でしかも自我の強いために自分自身も不幸になり、他人をも不幸にさせたところのアドルフの運命は又、私の運命さながらに思えたからだ。しかし、「アドルフ」の作者ほど、そういう弱々しい性格（恐らくそれは彼自身なのであろうけれど）に対するはげしい憎悪も持っていない、むしろそういう自分自身を甘やかすことしか出来そうもない私がそんな小説の真似なんかしようものなら、それによって更にもう一層自分自身をも、又他人をも不幸にするばかりであることが、わかり過ぎるくらい私にはわかって来たのだ。……こういうような考え方は、私の暗い半身にはすこし気に入らないようだったけれども、この頃のこんな田舎暮しのお蔭で、そう言った私の暗い半身は、もう一方の私の明るい半身に徐々に打負かされて行きつつあったのだ。

そうして今の私がそれならば書いてもみたいと思うものは、たとえばどんなに平凡なものでもいいから、これから私の暮らそうとしてしているようなこんな季節はずれの田舎の、人っ子ひとりいない、しかし花だらけの額縁の中へすっぽりと嵌まり込むような、古い絵のような物語であった。私は何とかしてそんな言わば牧歌的なものが書きたかった。私はこれまでも他人の書いたそういう作品を随分好きでもあり、そういう出来事に出遇ったというところでその人を羨ましくも思ってたが、私自身でそう言うものを書いてみよう

も、又、書けそうにも思えなかった。が、それだけ一層、今の私はそういう牧歌的なものを書いてみたいと思ひ立つたのである。——私はしかし、それを書くためには、いま自分の暮らしつつあるこの村を背景にするよりほかはなく、と言つて一月や二月ぐらいの滞在中にそういう出来事が果して私の身边に起り得るものかどうか疑わしかった。莫迦莫迦しいことだが、私は何度も林の中の空地で無駄に待ち伏せたものだった。男の子のように美しい田舎の娘がその林の中からひよつこり私の前に飛び出して来はしないかと。……そんな空しい努力の後、やつと私の頭に浮んだのは、あのお天狗様のいる丘のほとんど頂近くにある、あの見棄てられた、古いヴィラであった。あのヴィラを背景にして、そこに毎夏を暮らしていた二人の老嬢のいかにも心もとない存在を自分の空想で補いながら書いて行く——それなら何んだか自分にもちよつと書けそうな気がした。この間その家の荒廃した庭のなかへ這入り込んで其処から一時間ばかり眺めていた高原の美しい鳥瞰図だの、一かどのニイチェアンだった学生の時分からうろおぼえに覚えていた zweisam という、いかにもその老嬢たちに似つかわしいドイツ語だのを、ひよつくりと思ひ浮べながら……。

或る夕方、私は再びそのヴィラまで枯葉に埋まった山径を上って行った。庭の木戸は

私がそうして置いたままに半ば開かれていた。私の捨てた煙草たばこの吸殻すいがらがヴェランダの床ゆかに汚点しみのように落ちていた。私は日の暮れるまで、其処から林だの、赤い屋根だの、丘だの、それから真正面に聳そびえている「巨人の椅子きよいす」だのを、一々暗記してしまうほど熱心に見つめていた。……ときどき、こんな夕暮れ時に、二人のうちの私のよく覚えている方の神々しいような白髪はくはつの老婦人が、このヴェランダの、そう、丁度私の坐すわっているこの場所に腰こしを下ろしたまま、彼女かのじよのとうに死んでいる友人と話し合つてでもいると言つたような、空虚うつろな眼まなざしがまざまざと蘇よみがつてくる……と思うと、一瞬しゆんかん間かんそれがきらきらと少女の眼まなこざしのようにかがやく……家の中からは夕餉ゆうげの支度したくをしている、もう一方の婦人の立てる皿さらの音が聞えて来る……彼女はふと十字を切ろうとするように手を動かしかけるが、それはほんの下描したがきで終つてしまう……彼女にだけは一種の言語をもつていそうな気のする「巨人の椅子」……そんな一方の老嬢のさまざまな姿だけは、私わたしが実際にそれらを見て、そして無意識の裡うちにそれらを記憶きおくしていたのではないかと思えるくらい、まざまざと蘇よみがつて来るが、——もう一人の老嬢の方は、いつまでも皿の音ばかりさせていて、容易に私の物語の中には登場して来ようとはしない。私はどうしても彼女の倂おもかけを蘇よみがらすことが出来ないのである。……

そんな或る午後、私のあてもなくさまよっていた眼ざしが、急に注意深くなくて、私の丁度足許あしもとにある夕日のあたつてゐる赤い屋根の上にとまった。何か黒い小さなものがその屋根の頂きからころころと転がつて来ては、庇ひさしのところから急に小石のように墜落つらいらくして行くのだった。しばらく間を置いては又それをやっている。私は何だろうと思つて、眼を細くしながら見まもつていた。そうしてそれ等が二羽の小鳥であることを認めた。それ等が交尾こうびをしながら、庇のところまで一いっしょ緒に転がつて来ては、そこから墜落すると同時に、さあと二ふたまた又またに飛びわかれてゐるのだった。同じ小鳥たちなのか、他の小鳥たちなのか分らないが、それが何回となく繰くり返かされてゐる。——これは私の物語の中にとり入れてもいいぞ、と思ひながら私はそれを飽あかずに見まもつてゐる。——こんな風にして、自分の見つつあるものが自分の構想しつつかある物語の中へそのままエピソードとして溶とけ込んで来ながら、自分からともすると逃にげて行つてしまひそうになる物語の主題を少しずつ発展させてゐるように見える……。

アカシアの花が私の物語の中にはいつて来たのもそんな風であつた。その咲き出す頃が丁度私の田舎暮しもそのクライマックスに達するのではないかというような予覚のする、例の野薔薇のばらの苔つぼみの大きさや数を調べながら、あのサナトリウムの裏の生いけ牆がきの前は何なん遍べん



も行つたり来たりしたけれど、その方にばかり気を奪られていた私は、其処から先きの、その生牆に代つてその川べりの道を縁どりだしているアカシアの並木には、ついで注意をしたことがなかった。ところが或る日のこと、サナトリウムの前まで来かかった時、私の行く手の小径がひどく何時もと變つていのように見えた。私はちよつとの間、それから受けた異様な印象に戸惑いした。私はそれまでアカシアの花をつけているところを見たことがなかった。それが私の知らないうちにそんなにも沢山の花を一どに咲かしているからだとは容易に信じられなかつたのであつた。あのかよわそうな枝ぶりや、織細な楕円形の軟かな葉などからして私の無意識の裡に想像していた花と、それらが似てもつかない花だつたからであつたかも知れない。そしてそれらの花を見たばかりの時は、誰かが悪戯をして、その枝々に夥しい小さな真つ白な提灯のようなものをぶらさげたのではないかと言うような、いかにも唐突な印象を受けたのだつた。やつとそれらがアカシアの花であることを知つた私は、その日はその小径をずっと先きの方まで行つてみることにした。アカシアの木立の多くは、どうかするとその花の穂先が私の帽子とすれすれになる位にまで低くそれらの花をぶんぶん匂わせながら垂らしていたが、中にはまだその木立が私の背ぐらいしかなくつて、それが殆ど折れそうなくらいに撓いながら自分の花を持ち

耐えている傍などを通り過ぎる時は、私は何んだか切ないような気持ちにすらなつた。アカシアの並木は何処まで行つても尽きないように見えた。私はとうとう或る大きなアカシアを撰んでその前に立ち止まつた。私は何とかしてこれらのアカシアの花が私に与えたさっきの唐突な印象を私自身の言葉に翻訳して置きたいと思つたのだ。それらの花のまわりには無数の蜜蜂がむらがり、ぶんぶん唸り声を立てていた。しかしそれらの蜜蜂は空気のなかで何処で唸つているともつかかなかつたし、それに私はさつきから自分の印象をまとめようとしてそれにばかり夢中になつていたので、そんな唸り声にふと気づく度に、何んだか私自身の頭脳がひどい混乱のあまりそんな具合に唸り出しているのではないかと  
言うような気もされた。……

その村の東北に一つの峠があつた。

その旧道には樅や山毛櫸などが暗いほど鬱蒼と茂つていた。そうしてそれらの古い幹には藤だの、山葡萄だの、通草だのの蔓草が実にややこしい方法で絡まりながら蔓

延んしていた。私が最初そんな蔓草に注意し出したのは、藤の花が思いがけない縦の枝か  
 らぶらさがっているのにびっくりして、それからやっとその縦に絡みついていて藤づるを  
 認めてからであつた。そう言えば、そんなような藤づるの多いことつたら！ それらの藤  
 づるに絡みつかれている縦の木が前よりも大きくなつたので、その執拗しつような蔓がすっかり  
 木肌きはだにめり込んで、いかにもそれを苦しそうに身もだえさせているのなどを見つめている  
 と、私は無気味になつて来てならない位だつた。——或る朝、私は例の気まぐれから峠ま  
 で登つた帰り途みち、その峠の上にある小さな部落の子供等ら二人と道づれになつて降りて来た  
 ことがあつた。その折のこと、その子供たちはいろいろな木に絡まっている、もつと他の  
 山葡萄だの、通草だのをも私に教えてくれたのだつた。子供たちは秋になるとそれ等の実  
 を採りに来るので、それ等のある場所を殆んど暗記していた。それからまた小鳥の巢すのあ  
 る場所を私に教えてくれたりした。彼等は峠で力餅ちからもちなどを売っている家の子供たちで  
 あつた。大きい方の子は十二で、小さい方の子は七つぐらいだつた。三人兄弟なのだが、  
 その真ん中の子が村の小学校からまだ帰らぬので峠の下まで迎えむかに行くのだと言つていた。  
 子供たちは何を見つけたのか急に私を離れて、林のなかへ、下生えを掻かき分けながら駈  
 けこんでいった。そうして一本のやや大きな灌木かんぼくの下に立ち止まると、手を伸ばしてそ

の枝から赤い実を揉ぎとつては頬張つていた。それは何の実だと訊いたら、「茱萸だ」と彼等は返事をした。そうして彼等はときどき私の方をふり向いて手招きをしたが、私が下生えに邪魔をされてなかなか其処まで行くことが出来ずにいると、大きい方の子がその実を少しばかり私のために持つて来てくれた。私は子供たちの真似をしてそれを一つずつこわごわ口に入れてみた。なんだか酸っぱかった。私はしかしそれをみんな我慢をして嘔み込んだ。そうして子供たちが低い枝にあつた実をすっかり食べつくしてしまうと、今度は高くて容易に手の届きそうもない枝をしきりに手ぐろうとしては失敗しているのを、私は根気よく、むしろ面白いものでも見ているように見入っていた。

子供たちはまた林の中のいろいろな抜け道を私に教えてくれようとした。そうして急な草深い斜面をずんずん駆け下りて行った。私はそのあとから危かしそうな足つきでついて行った。ほとんど何処からも日の射し込んで来ないくらい、木立が密生して枝と枝との入りまじっているところもあつた。かと思うと急に私たちの目の前が展けて、ちよつとの間何も見えなくなるくらい明るい林のなかの空地があつたりした。私たちがそういう林の中の空地の一つへ辿り着いた時、突然、一つの小石が何処からともなく飛んで来て私たちの足許に落ちた。その飛んで来たらしい方を私たちがまぶしそうに振り向いた途端、

数本の山毛櫨ぶなを背にしながら、ほとんど垂直なほど急な勾配こうばいの藁屋根わらやねをもった、窓もなにももないような異様な小屋の蔭かげへ、小さな黒い人影ひとかげが隠れるのを私たちは認めた。それを知つても、しかし、私の小さな同伴者どうはんしやたちは何も罵ろうとせず、却かえつて私に向つて何かその言訣いいわけでもしたいような、そしてそれを私に言い出したものかどうかと躊躇ためらつているような、複雑な表情をして私の方を見上げていたので、私は不審ふしんそうに、

「あの子は白痴ばかなのかい？」と訊いた。

子供たちは顔を見合わせていた。それから大きい方の子が低声こしえで私に答えた。

「そうじゃないよ。——あれあ気がいの娘むすめだ」

「ふん、それであんな変な家にいるんだね？」

「あれあ氷倉こおりぐらだ。——あの向うの家だ」

しかしその氷倉だという異様な恰好かっこうをした藁小屋わらこやに遮さぎられて、その家らしいもの一部分すら見えないところを見ると、恐おそらく小さな掘立ほったて小屋こやかなんかに違ちがいなかった。

「気ががいつておとつつあんがかい？」

「……」兄も弟も同時に頭を振った。

「じゃ、おつかさんの方だね？」

「うん……」そう答えてから、兄は弟の方を見い見い誰だれに言うともなく言った。「ときどき川んなかで唳どな鳴っているなあ」

「おれも一度向うの川で見た」弟の返事である。

「向うって何処だ？」

「向うの方だ」弟は何んだか自信のなさそうな、いまにも泣き出しそうな顔をして、漠ぼくぜ然んと或ある方向を私に指して見せた。

「そうか」私はわかったような振りをした。「……おとつつあんは何をしているんだ？」

「木樵きこりだなあ」とこんどはまた兄が弟の方を見い見い言った。

「変なとつつあんだ」弟は顔をしかめながらそれに答えた。

氷倉の蔭から、再びちらりと小娘らしい顔が出たようだったけれど、私たちの方からは丁度逆光線だったので、よくもそれを見分けないうちに、その顔はすぐ引っ込んでしまった。それつきりその小娘は顔を出さなかった。ただ私たちはそれから間もなく異様な叫さけびを耳にした。それはその小娘が私たちを罵ったのか、それとも私たちには見えぬ小屋の中やまぼとからその小娘に向ってそれが叫ばれたのか、それとも又また、その裏の林のなかで山鳩やまばとでも啼ないたのだろうか？　ともかくも、その得体えたいの知れぬアクセントだけが妙みょうに私の耳にこび

りついた。——が、私たちは無言のまま、ただちよつと足を早めながら、その空地を横切つて行つた。私たちはそれから再び林の中へ這入つた。その中へ這入ると急に薄暗くなつたようだけれど、私たちの眼底にはいまの空地の明るさがこびりついているせいか、暫らく私たちの周りには一種異様な薄明りが漂っているように見えた。そんな林の中をずんずん先きになつて駈け下りて行く子供たちの跡について行きながら、彼等がいまだに何となく昂奮しているらしいのを、私は漠然と感じていた。そうして、こんな風に彼等と一緒に峠を下りて行く私は一体彼等にはどんな人間に見えているのだろうか？ とそういう現在の私自身にも興味を持つたりした。

峠を下り切つたところに架つている白い橋の上に、小さな男の子が一人、鞆を背負つたまま、しよんぼりと立っていた。私の連れ立っている子供たちがその男の子に同時に声をかけた。彼等を見るとその男の子はにつこりと微笑した。が、私にも気がつくと、人見知りでもするかのように、橋の下の溪流の方へその小さな顔をそむけた。私も私で、しばらくその溪流をぼんやり見下ろしていた。さつき林のなかの空地で子供の一人が漠然と指したそのずつと上流にあたる方を心のうちに描きながら。それから私は三人の子供たちに小銭をすこし与えて、彼等と別れた。

雨が降り出した。そうしてそれは降り続いた。とうとう梅雨期に入ったのだった。そんな雨がちよつと小止みになり、峠の方が薄明るくなつて、そのまま晴れ上るかと思うと、峠の向側からやつと匍い上つて来たように見える濃霧が、峠の上方一面にかぶさり、やがてその霧がさあと一気に駆け下りて来て、忽ち村全帯の上に拡がるのであつた。どうかすると、そういう霧がずんずん薄らいで行つて、雲の割れ目から葦色の空がちらりと見えるようなこともあつたが、それはほんの一瞬間きりで、霧はまた次第に濃くなつて、それが何時の間にか小雨に變つてしまつていた。

私はその暗い雲の割れ目からちらりと見える、何とも言えずに綺麗な、その葦色がたまらなく好きであつた。そうしてそれは、殆んど日課のようにしていた長い散歩が雨のために出来なくなつている私にとつては、たとえ一瞬間にもしろそれが見られたら、それだけでもその日の無聊が償われたようにさえ思われた程であつた。——「おまえの可愛い眼の葦、か……」そんなうろおぼえのハイネの詩の切れっぱしが私の口をふと衝いて出る。



「ふん、あいつの眼が、こんな董色じやなくなつて仕合せというものだ。そうでなかつた日にや、おれもハイネのようにこう眩つぶやきながら嘆なげいてばかりいなきやなるまい。——おまえの眼の董はいつも綺麗に咲さくけれど、ああ、おまえの心ばかりは枯かれ果てた……」

そんな鬱うつと陶とうしいような日々も、相変らず私の小説の主題は私からともすると逃げて行きそうになるが、私はそれをば辛しん抱ぼうづよく追いまわしている。私が最初に計画していたところの私自身を主人公とした物語を書くことはとづくに断念していたけれど、私はそれの代りに、その物語の主人公には一体どんな人物を選んだらいいのか、それからしても迷つていた。……どうにか一方の老ろう嬢じょうは私の物語の中に登場させることは出来ても、もう一方の方は台所で皿さらの音ばかりさせているきりで、何時まで経たつてもヴェランダに出て来ようとしなない二人の老嬢たちの話、冬になるとすっかり雪に埋うずまってしまふこんな寒村に一人の看護婦を相手に暮くらしている老医師とその美しい野薔薇のばらの話、ときどき気が狂くるつて溪流のなかへ飛び込こんでは罵ののしわめいているという木樵きせうの妻とその小娘の話、——そういうような人達のとりとめもない幻イマアジユ像ざうばかりが私の心にふと浮うかんではふと消えてゆく……

或る午後、雨のちよつとした晴れ間を見て、もうぼつぼつ外人たちの這入りだした別べつ所そ

莊うらの並ならんでいる水車の道のほつりを私が散歩をしていたら、チェツコスロヴァキア公使館の別莊の中から誰かがピアノを稽古けいこしているらしい音が聞えて来た。私はその隣となりのまだ空いている別莊の庭へ這入りこんで、しばらくそれに耳を傾かたむけていた。バッハのト短調の遁走曲フウグらしかった。あの一つの旋律メロデーが繰り返され繰り返されているうちに曲が少しずつ展開して行く、それがまた更に稽古けいこをしているために三四回ずつひとところを繰り返されているので、一層それがたゆたいがちになつている。……それを聴きいているうちに、私はまるで魔まにでも憑つかれたような薄気味のわるい笑いを浮べ出してた。そのピアノの音のたゆたいがちな効果こうかが、この頃ころの私の小説を考え悩なやんでいる、そのうちにそれがどうやら少しずつ発展して来ているような氣もする、そう言つた私のもどかしい氣持さながらであつたからだ。

或る朝、「また雨らしいな……」と溜息ためいきをつきながら私が雨戸を繰ろうとした途端に、その節穴ふしあなから明るい外光が洩もれて来ながら、障子しょうじの上にくつきりした小さな楕円形だえんけい

の額縁がくぶちをつくり、そのなかに数本の落葉松からまつの微細画ミニユアチユアを逆さまに描いているのを認めると、私は急に胸をはずませながら、出来るだけ早くと思つて、そのため反かえつて手間どりながら雨戸を開けた。私が寢床ねどこのなかで雨音かと思つていたのは、それ等の落葉松の細かい葉たまに溜たまつていた雨滴が絶えず屋根の上に落ちる音だったのだ。私はさて、まぶしそうな眼つきで青空を見上げた。私は寢間着のまま一度庭のなかへ出てみたが、それから再び部屋に帰り、そしてフラノの散歩服きかに着換かえながら、早朝の戸外へと出て行つた。私は教会の前を曲つて、その裏手の橡とちの林を突き抜けて行つた。私はときどき青空を見上げた。いかにもまぶしそうに顔をしかめながら。

私が小さな美しい流れに沿うて歩き出すと、その徑みちにずっと笹縁ささべりをつけている野苺のいちごにも、ちよつと人目につかないような花が一ぱい咲いていて、それが或る素晴すばらしいもののほんの小さな前奏曲プレリユウドだと言つたように、私を迎えた。私は例の木橋の上まで来かかると、どういう積りか自分でも分からずに二三度その上を行つたり来たりした。それから、漸やつと、まるで足が地上につかないような歩調で、サナトリウムの裏手の生牆いけがきに沿うて行つた。私は最初のいくつかの野薔薇しげの茂みを一種の困惑こんわくの中にうっかりと見過してしまつたことに気がついた。それに気がついた時は、既すでに私は彼等の発散している、そして

雨上りの湿しめった空気のために一とこほに漂いながら散らばらないでいる異常な香かおりの中に包まれてしまつていた。私は彼等の白い小さな花を見るよりも先に、彼等の発散する香りの方を最初に知つてしまつたのだ。しかし私は立ち止ろうとはせずになおも歩き続けながら、私は今すれちがいつつある一つの野薔薇の上に私のおずおずした最初の視線を投げた。私は、私の胸のあたりから何かを訴うったえでもしたいような眼つきで私をじつと見上げている。その小さな茂みの上に、最初二つ三つばかりの白い小さな花を認めたきりだつた。が、その次の瞬しゆんかん間には、私はその同じ茂みのうちに殆ど二三十ばかりの花と、それと殆ど同数の半ば開きかかつた荅つぼみとを数えることが出来た。それはごく僅わずかの間だったが、そんな風に私が自分の視線のなかに自分自身を集中させてしまつてからと言ふもの、そんなにも簇むらがつているそれ等の花がもう先刻さつきのように好い匂においがしなくなつてしまつて私には愕おどろいた。そうして改めてそれを嗅かごうとすると、そうするだけ一層それは匂わなくなつて行くように見えた。——私は注意深く歩き続けながら、順ぐりにいくつかの野薔薇の木とすれちがつて行つたが、とうとう私はいつかレエノルズ博士がその上に身を踞こしめていた一つの茂みの前まで来た。私は思わずそこに足を停とめた。——

そうして私はその野薔薇の前に、ただ茫ぼうぜん然として、何を考へていたのか後で思い出そ

うとしても思い出せないようなことばかり考えていた。どれよりも最も多くの花を簇たばがらせているように見えるその野薔薇とそっくりそのままのものを何処どこかで私は一度見たことがあるように思えて、それをしきりに思い出そうとしていたかのようでもあった。——それはすこし長い放心状態の後では、しばしば私にやってくるどころの一種独特の錯覚さつかくであった。放心のあまりに現在そのものの感じがなくなり、私は現在そのものをしきりに思い出そうとして焦あせっているのかも知れなかった。——それから私は再び我に返って歩き出した。私の沿うて行く生牆まじには、それらの野薔薇が、同じような高さの他の灌木かんぼくの間に雑まじりながら、いくらかずつの間を置いてはならんでいるのだった。あたかも彼等が或る秘密な法則に従ってそう配置されてでもいるかのよう。そうしてその微妙びみょうな間歇かんけつが、ほとんど足が地につかないような歩調で歩きつつある私の中に、いつのまにか、ほとんど音楽の与えるような一種のリズミカルな効果を生じさせていた。……そうしてそれに似た或る思い出をこんどはさつきと異つて、鮮明せんめいに私のうちに蘇よみがえらせるのであった。……十年ぐらい前の或る夏休みに、私が初めてこの村へ来た時のこと、宿屋の裏から水車場のあたる道の方へ抜けられるようになってい、やっと一人ひとりだけ通れるか通れない位の、狭せまい、小さな坂道を上って行こうとした途とちゆう中で、私はその坂の上の方から数人の少女たちが笑

いさざめきながら駈け下りるようにして来るのに出遇った。私はそれを認めると、そういう少女たちとの出会いは私の始終夢みていたものであったにも拘らず、私はよつぽど途中から引つ返してしまおうかと思つた。私は躊躇してゐた。そういう私を見ると、少女たちは一層笑い声を高くしながら私の方へずんずん駈け下りて来た。そんなところで引つ返したりすると余計自分が彼女たちに滑稽に見えはしまいかと私は考え出してゐた。そこで私は思い切つて、がむしやらにその坂を上つて行つた。するとこんどは少女たちの方で急に黙つてしまつた。そうしてやつと笑うのを我慢しているとでも言つたような意地悪そうな眼つきをして、道ばたの丁度彼女たちのせいぐらいある灌木の茂みの間に一人一人半身を入れながら、私の通り過ぎるのを待つてゐた。私は彼女たちの前を出来るだけ早く通ろうとして、そのため戻つて長い時間かかつて、心臓をどきどきさせながら通り過ぎて行つた。……その瞬間私は、自分のまわりにさつきから再び漂いだしている異常な香りに気がついて愕いた。私がそんな風に私の視線を自分自身の内側に向け出して、ひよいと野薔薇のこゝろを忘れていたら、そういう気まぐれな私を責め訴えるかのように、その花々が私にさつきの香りを返してくれたのだつた。そう、それ等の少女たちの形づくつた生垣はちやうどお前たちにそっくりだつたのだ！ ……

私はその朝はどうしたのかクレゾオルの匂のぶんぶんするサナトリウムの手前から引返した。その向うには、その思いがけない美しきでひととき私の心を奪<sup>うば</sup>っていたアカシアの花が、一週間近い雨のためにすっかり散つて、それが川べりの道の上にとどこど<sup>ひとか</sup>ころ塊<sup>たま</sup>りになりながら落ちているのがずっと先きの先きの方まで見透<sup>みとお</sup>されていた。

それから数日間、こんどはお天気の良い日ばかりが続いていた。毎朝私は起きるとすぐその辺まで散歩に行った。しかし私はその花をつけた生牆の前にあんまり長いこと立ちもとおっていないで、それに沿うて素通<sup>すとお</sup>りして来るきりの方が多かった。私は言わば、唯<sup>ただ</sup>、その生牆<sup>かんけつ</sup>に間歇<sup>むら</sup>的に簇<sup>むら</sup>がりながら花をつけている野薔薇の与える音楽的効果を楽しみさえすればよかつたのであるから。だから或る時などは、それのみを楽しむために、私は故意<sup>ぎ</sup>とよそつぽを見ながら歩いたりした。

或る朝、私はそんな風にサナトリウムの前まで行ってすぐそのまま引つ返して来ると、向うの小さな木橋を渡り、いまその生牆に差しかかつたばかりのレエノルズ博士の姿を認めた。すぐ近くの自宅から病院へ出勤して来る途中らしかつた。片手に太いステッキを持ち、他<sup>ほか</sup>の手でパイプを握<sup>にぎ</sup>つたまま、少し猫背<sup>ねこせ</sup>になつて生牆の上へ気づかわしそうな視線を注ぎながら私の方へ近づいて来た。が、私を認めると、急にそれから目を離<sup>はな</sup>して、自分の

前ばかりを見ながら歩き出した。そんな気がした。私も私で、そんな野薔薇などには目もくれない者のように、そっぽを向きながら歩いて行った。そうして私はすれちがいざま、その老人の焦<sup>しょうてん</sup>点を失ったような空虚<sup>うつろ</sup>な眼差<sup>まなざ</sup>しのうちに、彼の可笑<sup>おか</sup>しいほどな狼狽<sup>ろうばい</sup>と、私を気づまりにさせずにおかないような彼の不機嫌<sup>ふきげん</sup>とを見抜<sup>みぬ</sup>いた。

それから数日後の或る朝だった。だんだんに夏らしい色を帯び出して来た美しい空が、私にだけ、突然物悲しく閉<sup>とぎ</sup>ざれてしまったように見えた。毎朝のようにそれに沿うて歩きながら、しかし、よく注意して見ようとはしないでいた野薔薇の白い小さな花が、いつの間<sup>ま</sup>にやら殆ど全部蝕<sup>むし</sup>ばまれて、それに黄褐<sup>おうかつしよく</sup>色のきたならしい斑点<sup>はんてん</sup>がどっさり出来てしまっていることに、その朝、私は始めて気がついたのだった。

……数年前までは半分壊<sup>こわ</sup>れかかった水車がごとごと音を立てながら廻<sup>まわ</sup>っていた小さな流れのほとりには、その大抵<sup>たいてい</sup>が三四十年前に外人の建てたと言われる古いバンガロオが雑<sup>ぞ</sup>木林<sup>うきばやし</sup>の間に立ちならんでいたが、そこいらの小径<sup>こみち</sup>はそれが行きづまりなのか、通り抜け



られるのか、ちよつと区別のつかないほど、ややっこしかったので、この村へ最初にやつて来たばかりの時分には、私はひとりで散歩をする時などは本当にまごまごしてしまうのだった。確かに抜け道らしいんだが、その小径は突然外人たちのお茶などを飲んでいゝウエランダのすぐ横を通つたりするのだった。そういう私道なのか、抜け道なのか分からないやうな或る小径に又しても踏み込んでしまった私は、私の背ぐらいある灌木の茂みの間から不意に私の目の前が展けて、その突きあたりにヴェランダがあり、籐の寝椅子に一人の淡青色のハーフ・コートを着て、ふつさりと髪を肩へ垂らした少女が物憂げに靠れかかっているのを認め、のみならず、その少女が私の足音を聞きつけてひよいと私の方を振り向いたらしいのを認めるが早いのか、私は顔を赤らめながら、その少女をよく見ずに慌てて其処から引つ返してしまった。——その時若し私がその少女をもつとよく見たら、それが数日前に私が宿屋の裏の狭い坂道ですれちがった数人の少女たちの中の一人であることに気がついて、私の狼狽はもつと大きかつただろうに。……

この頃刈つたばかりらしい青々とした芝生が、その時にはその少女の坐つていたヴェランダをこつちからは見えなくさせていた一面の灌木の茂みに代えられて、そうしていま私のぼんやり立っているこの小径からその芝生を真白い柵が鮮やかに区限つて。……その

ように、すべてが變つていた。いま私にまぎまぎと蘇つて来たところの、そう言うような、最初に私が彼女かのじよに会つた当時の彼女のういういしい面影おもかげと、数カ月前、最後に会つた時の、そしてその時から今だに私の眼先にちらついてならない彼女の冷やかな面影と、何と異つて見えることか！ 彼女の容貌ようぼうそのものがそんなにも變つたのか、それとも私の中にその幻像イマアジユが變つたのか、私は知らない。しかし何もかも、恐らく私自身も變つてしまつたのだ。……

私はそのとき向うの方から何かを重そうに担にないながら私の方に近づいてくる者があるのを認めた。それは羊齒しだを背負つている宿の爺じいやであつた。私はいつか彼の話していた羊齒のことを思い出した。

私は爺やの言うがままに、彼についてその庭の中へおずおずと這入はいつて行つた。そうして爺やが庭の一隅にその羊齒を植えつけている間、私は黙つてヴェランダの床板に腰こしかけていた。爺やはときどき羊齒を植えつける場所について私に助言を求めた。その度毎たびごとに、私の胸はしめつけられた。

一通りみんな植えつけてしまうと、爺やは私のそばに腰を下ろした。私の与えた巻煙まきたば草こを彼は耳にはさんだきり、それを吸おうとはせずに、自分の腰から鉈豆なたまめの煙管きせるを抜ぬ

いた。

私はふだんの無口な習慣から抜け出ようと努力しながら、これもまた機嫌買いらしい爺やを相手に世間話をし出した。

「爺やさん、峠の途中に気がいの女がいるそうだけれど、それあ本当なのかい？」

「へえ、可哀かわいそうにすこし気が変なんでございますよ、——先せんにはうちでもちよいちよい何かくれてやりましたもので、よく山からにこにこしながら、いろんな花を採って来てくれたりしましたつけが。……ただ、そいつの亭主ていしゅというのが大へんな奴やつでしてね、こつちからわざわざ何か持つて行つてやつたりしますと、いつも酔よつぱら払はらつていちやあ、『くれるというものなら貰もらつといたらいじやねえか』と、嬢かかあの気の毒あがるのを叱しかりつけようつた調子なんですからね。……それで、こつちでもだんだん情なさけが通わなくなつて来て、この頃ころじゃ、もう、ちつとも構まいませんです」

「何だつてね、——その気ちがいつて、ときどき川のなかへ飛び込むんだつてね？」

「へえ、そんな人騒ひとさわがせなこともときどきやりますが、あれあどうも少し狂きやうげん言げんらしいで……」

「そうなのかい？ ——どうしてまたそんな……」

私はふと口ごもりながら、あの林のなかの空地にあつた異様な恰好かつこうをした氷倉こおりぐらだの、その裏の方でした得体えたいの知れない叫び声さけだのを思い浮べた。そうしてそれ等らのものを今だにこんなにも異常に私に感じさせている、峠の子供たちの不思議な領分の上を思った。——子供たちよ、よし大人たちにはそうという狂行が贖にせものに見えようとも、お前たちは、そんな大人たちには鎖とぎされている、お前たちだけのその領分の中で遊べるだけ遊んでいるがいい。

爺やとの話は、私の展開さすべく悩んでいた物語のもう一人の人物の上にも思いがけない光を投げた。それはあの四十年近くもこの村に住んでいるレエノルズ博士が村中の者か  
らずつと憎まれ通しであると言うことだった。或る年あの冬、その老医師の自宅が留守中に  
火事を起したことや、しかし村の者は誰一人それを消し止めようとはしなかったことや、  
そのために老医師が二十数年もかかって研究して書いていた論文がすっかり灰燼かいじんに帰し  
たことなどを話した、爺やの話の様子では、どうも村の者が放火したらしくも見える。

（何故なぜそんなにその老医師が村の者から憎まれるようになったかは爺やの話だけではよく  
分からなかったけれど、私もまたそれを執拗しつように尋ねようとはしなかった。）——それ以  
来、老医師はその妻子だけを瑞西スイスに帰してしまい、そうして今だにどうい気なのか頑固がんこ

に一人きりで看護婦を相手に暮しているのだった。……私はそんな話をしていゝる爺やの無表情な顔のなかに、嘗かつて彼自身もその老外人に一種の敵意をもつていたらしいことが、一つの傷のように残つていゝるのを私は認めた。それは村の者の愚おろかしきの印しるしであるうか、それともその老外人の頑かたくなな氣質のためであろうか？ ……そう言うような話を聞きながら、私は、自分があんなにも愛した彼の病院の裏側の野薔薇のばらの生いけがき壁かきのことを何か切ないような気持になつて思ひ出してゐた。

私はヴェランダの床ゆか板いたに腰かけたきり、爺やがまた何処どこからか羊齒やぎばなを運んで来るまで、さまざまな物思ひにふけりながら待つてゐた。それからまた爺やの羊齒やぎばなを植うえつけるのをしばらく見守つてゐた。しかし今度は黙つたままで。そうして私は老人の動かしてゐる無気味に骨ばつた手の甲こうを目で追つてゐるうちに、ふいと「巨人きよじんの椅子いす」のことを思ひ浮うかべた。——私は爺やが羊齒やぎばなをすつかり植うえおえるのを待とうとしないで爺やと別れた。

それから数分後に、私はその巨おおきな岩いわを目まのあたりに見ることのできる、例れいの見棄みすてられたヴィラの庭にわのなかに自分自身を見出みいだした。そのヴィラに昔住むかしんでゐた二人の老ろうじやう嬢ぢやうのことについては爺やも私に何んにも知らせてくれなかつた。「ああ、セエモオルさんですか」と言つたきりだつた。何か知つてゐるさうだつたがもう忘れてしまつたらしかつた。

そうしてただ不機嫌そうに黙っていた。「そうすると、それを知っているのはお前だけだ  
がなあ……」と私は、いま私の下方に横わっている高原一帯を隔てて、私と向い合ってい  
る、遙か彼方の「巨人の椅子」を、あたかもそのあたりに見えない巨人の姿を探してでも  
いるかのような眼つきで、まじまじと見まもっていた。

だんだんに日が暮れだした。私のすぐ足許の、いつかその赤い屋根に交尾している小  
鳥たちを見出したヴィラは、もう人が住まっているらしく、窓がすっかり開け放たれて、  
橙色のカーテンの揺らいでいるのが見えた。ときおり御用聞きがその家のところまで  
自転車を重そうに押し上げてくるらしい音が私のところまで聞えて来た。もうそろそろ私  
もこれまでのようにこの空家の庭でぼんやりしていられそうもないなと思った。そんな気  
がしだすと、何んだかもうこれが最後の時でもあるかのように、私は、私のすべて  
の注意を、半分はこの荒廃したヴィラそのものに、半分はこの高みから見下ろせる一帯  
の美しい村、その森、その花咲ける野、その別荘、それからもう霞みながらよく見えな  
くなり出した丘々の巖、それだけがまだ黒々と残っている「巨人の椅子」などに傾け出  
していた。それにも拘わらず、私はときどきややもするとそれ等のものごとくを見失  
い、そしてまるつきり放心状態になっている自分自身に気がついて、思わずどきどきとする

のだった。

突然、ちょうど私の頭上にある、その周囲だけでもうすっかり薄暗くなっている大きな樅の、ほとんど水平に伸びた枝の一つに、ばたばたとびっくりするような羽音をさせながら、一羽の山鳩が飛んできて止まった。そうしてそんなところに私のいることに向うでも愕いたように、再びすぐその枝から、薄暗いために一層大きく見えながら、それは飛び去って行った。あたかも私自身の思惟そのものであるかのごとく重々しく羽搏きながら、そしてその翼を無気味に青く光らせながら……。

## 夏

突然、私の窓の面している中庭の、とつくにもう花を失っている躑躅つづじの茂みしげの向うの、別館べっかんの窓ぎわに、一輪ひまわりの向日葵が咲きでもしたかのよう、何んだか思いがけないようなものが、まぶしいほど、日にきらきらとかがやき出したように思えた。私はやつと其処そこに、黄いろい麦藁帽子むぎわらぼうしをかぶった、背の高い、痩せぎすな、一人の少女が立っているのだということを確認することが出来た。……誰かを待っているらしいその少女は、さつきから中庭のあちらこちらに注意深そうな視線をさまよわせていたが、最後にその視線を、離れの窓から彼女の方をぼんやり見つけていた私の上に置いた。そんな最初の出會であいの時には、大概たいがいの少女たちは、自分が見つめられていると思う者からわざとそっぽを向いて、自分の方ではその者にまったく無関心であることを示したがるものだが、そんな羞恥しゅうちと高慢こうまんさとの入り混った視線とは異つて、私の上に置かれているその少女の率そつちよく直な、好奇こうき心んでいっばいなような視線は、私にはまぶしくつてそれから目をそらさずにはいられないほどに感じられたので、私はそのときの彼女——最初に私の目の前に現れたときの彼女



に就いては、そのやや真深かにかぶった黄いろい帽子と、その鍔のかげにきらきらと光っていた特徴のある眼ざしとよりほかには、殆んど何も見覚えのない位であった。……やがて別館から彼女の父らしいものが姿を現した。そしてその二人づれは私の窓の前を斜めに横切つて行つたが、見ると、彼女はその父よりも背が高くくらいであった。そしてその父らしいものが彼女にしきりに話しかけるのに、彼女はいかにも気がなきそうに返事をしながら、いつまでも私の方へ躑躅の茂みごしにその特徴のある眼ざしをそそぎつづけていた。……その二人が中庭を立ち去つてしまつた跡も、私はしばらく、今しがたまでその少女が向日葵のように立っていた窓ぎわの方へ、すこし空虚になつた眼ざしをやつていたが、ふと気づくと、そこいらへんの感じが、それまでとは何んだかすつかり變つてしまつているのだ。私の知らぬ間に、そこいら一面には、夏らしい匂いが漂い出しているのだつた。……

その日の夕方の、別館の方への私の引越し、（今まで私の一人で暮らしていた、古い離れが修繕され始めるので——）その次ぎの日の、その少女の父の出発、それから他にはまだ一人も滞在客のないそんな別館での、その少女と二人っきりの、背中合わせの暮らし……。

しかし私は毎日のように、ほとんど部屋に閉じこもったきりで、自分の仕事に没頭していた。その私の書きつつある「美しい村」という物語は、六月頃からこの村に滞在している私が、そんなまだ季節はずれの、すつからかんとした高原で出会ったことを、それからそれへと書いて行つたものだった。そうして私は丁度いま、私がそれまで昔の恋人に對する一種の顧慮こりよから、その物語の裏側から、そして唯ただ、それによつてその淡々たんたんとした物語に或る物悲しい陰影ニユアンスを与えるばかりで満足しようとしていた、この村での数年前の彼女たちとの花やかな交際の思い出、ことにこの村での彼女たちとの最初の歡よろこばしい出会いを、とある日、道ばたに咲き揃そろつてゐる野薔薇のばらの花がまざまざと私のうちに蘇よみがえらせ、それが遂ついに思いがけぬ出口を見つけた地下水のように、その物語の静かな表面に滾こん々と湧わきあがつてくるところを書き終えたばかりのところだった。そうしてそういう昔のさまざまな歡たのしみばしい出会いの追憶ついでに耽ふけつてゐる暇ひまもなく、すでに私から巢立なすだてつていったそれらの少女たち、ことにそのうちの一人との気まづい再会を恐れて、季節に先立さきだつてこの村を立ち去ろうとする、そんな私の悲しい決心を、その物語の結尾として、私はこれから書こうとしているところだった。

私の新しい部屋は、別館の二階の奥おくまったところで、南向きの窓があり、そしてその窓

からは数本の大きな桜の幹ごしに向うの小高い水車の道に面しているいくつかのヴィラの裏側がちらちらと見えていた。そしてその窓のすぐ下を、私がそれらの少女たちと初めて出会ったところの、例の抜け道が、小さな坂になりながら、灌木かんぼくのなかに細々と通っているのだった。……私は私のやりかけている仕事から気持ちをそらすまいとして、私とたった二人きりでその別館の中に暮らしてしているその未知の少女とは、わざと背中を向き合わせてばかりいた。その癖くせ、私は私の窓のすぐ下を通っているその坂道を、毎朝、一定の時刻に、絵具箱をぶらさげながら、その少女が水車の道の方へと昇のぼってゆくのを見逃したことはなかった。丁度、午前中のその時刻の光線の具合ぐあいで、木洩れ日こもりびがまるで地肌じはだを豹ひょうの皮のように美しくしている、その小さな坂を、ややもすると滑すべりそうな足つきで昇のぼってゆくその背の高い、痩せぎすな後姿を見送りながら、その上の水車の道に出て、さて、それから彼女はどの小径こみちをどう通って、どんな場所へ絵を描きに行くのだろうか、そこいらの林のなかの小径が実にややこしく、私自身も初めてこの村へ来た当時は、何度も道に迷ってしまった位ではあったし、それにまたそんなことからして一人の少女と私との奇妙きみょうな近づきが始まったりしたので、私は、絵を描く場所を捜さがしながらそんな見知らぬ小径をさまよっているらしい彼女のことを、何となく気づかわしく思っていた。

しかし私は最初のうちはその少女を、唯、そんな風に私の窓からだの、或いは廊下などでひよつくり擦れちがいざま、目と目を合わせないようにして、そつと偷み見ていたきりであった。そんな具合で、私は彼女の顔を、まだ一度も、まともに眺めたことがなく、それに私の見たときは、いつも静止していないで、しかもそれぞれに異つた角度から光線を受けていたせいか、見る度毎に、その顔は変化していた。或る時は、そのやや真深かにかぶつた黄いろい麦藁帽子の下から、その半陰影のなかにそれだけが顔の他の部分と一しよに溶け込もうとしないで、大きく見ひらかれた眼が、きらきらと輝いていた。またそんな帽子をかぶらずに、庭園の中などで顔いっぱい強い光線を浴びながら、まぶしうにその眼を半分閉ざしているおかげで、平生の特徴を半分失いながら、そしてその代りにその瞬間までちつとも目立たないでいた唇だけが、苺のように鮮かに光りながら、ほとんど前のは別の顔に変わってしまうこともあった。

そのうちに私たちがやつと短い会話を取り交わすようになり、それと共に、屢しば、私

は彼女の顔をまともから眺めるようになったのにも拘らず、彼女の顔がなおも絶えず変化しているのに愕おどろいた。或る時は、その顔はあんまり血色がよく、すべすべしているので、私のためらいがちな視線はいくどもその上で空からすべ滑りをしそうになった。また他の時はすこし疲れつかを帯びたように沈しずんで、不透明ふとうめいで、その皮膚ひふの底の方にはなんだか董すみれいろ色いろのようなものが漂ぼらっているように見えた。そうかと思うと、その皮膚がすっかり透明になり、ぼうつと内側から薔薇色ばらいろを帯びているようなこともあった。ときどき以前に見たのと何処どこか似たような顔をしていることもあった。が、その顔は決して二度と同じものであることはなかった。

或る日のこと、私は自分の「美しい村」のノオトとして悪戯いたづら半分に色鉛筆いろえんぴつでもって丹た念んねんに描いた、その村の手製の地図を、彼女の前に拈ひろげながら、その地図の上に万年筆で、まるで瑞西スイスあたりの田舎いなかにでもありそうな、小さな橋だの、ヴィラだの、落葉松からまつの林だのを印しるしつけながら、彼女のために、私の知っているだけの、絵になりそうな場所を教えた。その時、私のそんな怪あやしげな地図の上に熱心に覗のぞき込んでいる彼女の横顔をしげしげと見ながら、私は一つの黒子ほくろがその耳のつけ根のあたりに浮うんでいるのを認めた。その時までちつともそれに気がつかないでいた私には、何んだかそれはいま知らぬ間に私の万年筆か

らはねたインクの汚点しみかなんかで、拭ふいたらすぐとれてしまいそうに思えたほどだった。翌日、私は彼女が私の貸した地図を手にして、早速さつそく私の教えたまざまな村の道をとおり見歩いて来たらしいことを知った。それほど私の助言を素直すなおに受入れてくれたことは、私に何んとも言いようのない喜びを与えた。

そんな村の地図を手にして、彼女かのじよがひとりで散歩がてら見つけて来た、或るささやかな溪流けいりゅうのほとりの、蝙蝠傘こうもりがさのように枝を拡げた、一本の樅もみの木の下に、彼女が画架ががを据すえている間、私はその画架の傍そばから、数本のアカシアの枝を透しながらくつきりと見えている、程遠ほどくの、真っ白な、小さな橋をはじめて見でもするように見入っていた。それは六月の半ば頃ころ、私が峠とうげから一いっしよ緒に下りてきた二人の子供たちと別れた、あの印象の深い小さな橋であった。——私は、彼女がしゃがみながら、パレットへ絵具をなすりつけ出すのを見ると、彼女の仕事を妨さまたげることを恐おそれて、其処そこに彼女をひとり残したまま、その溪流に沿うた小径をぶらぶら上流の方へと歩いて行った。しかし私は絶えず私の背後に

残してきた彼女にばかり気をとられていたので、私の行く手の小径の曲り角の向うに、一つの小さな灌木が、まるで私を待ち伏せてでもいたように隠れていたのに少しも気づかずに、その曲り角を無雑作に曲ろうとした瞬間、私はその灌木の枝に私のジャケツを引っかけて、思わずそこに足を止めた。見ると、それは一本の花を失った野薔薇だった。私はやつとのことで、その鋭い棘から私のジャケツをはずしながら、私はあらためてその花のない野薔薇を眺めだした。それが白い小さな花を一ぱいつけていた頃には、あんなにも私がそれで楽しんでいた癖に、それらの花がひとつ残らず何処かに立ち去ってしまった今は、そんな灌木のあることにすら全然気づこうとしなかった私に対して、それが精一杯の復讐をしようとして、そんな風に私のジャケツを噛み破ったかのようにさえ私には思えた。……そういう花のすつかり無くなった野薔薇をしばらく前にしながら、私はいつか知らず識らずに、それらの白い小さな花のように何処へともなく私から去っていった少女たちのことを思い出していた。……この頃、ともすると、一人の新しい少女のために、そんな昔の少女たちのことを忘れがちであったが、そう言えば、彼女たちがこの村においとやって来る時期ももう間ぢかに迫っているのだ。彼女たちが来ないうちに私はこの村をさっと立ち去ってしまった方がいい。そうしなくつちやいけない。——そう自分で自分に

言つて聞かせるようにしながら、その一方ではまた、この頃やつと自分の手に這入りかけている新しい幸福を、そうあつさりで見棄てて行けるだろうかどうかと疑っていた。そして私は自分の気持をそのどちらにも片づけることが出来ずに、自分で自分を持って余しながら、かれこれ一時間近くもその山徑をさまよつていた。そうしてその挙句、私がやつと気がついた時には、そんな風に歩きながら自分でも知らずに何度も指で引張つていたものと見えて、私の鼠色のジャケツの肩のところに出来たその小さな綻びは、もう目立つくらいに大きくなつていた。——私はどうとう踵を返して、再び溪流づたいにその山徑を下りてきた。そうして私は自分の行く手に、真つ白な、小さな橋と、一本の大きな蝙蝠傘のような樅の木を認めだすと、私はすこし歩みを緩めながら、わざと目をつぶつた。その木蔭になつて見えずにいるものを、私のすぐ近くに、不意に、思いがけぬもののように見出したかつたのだ。……どうとう私は我慢切れずに私の目を開けてみた。しかし彼女は私からまだ十数歩先きのところにいた。そうしてその木蔭にしゃがみながらそれまでパレットを削つていたらしい彼女が、その時つと立ち上つて、私にはすこしも気がつかないように、描きかけのキャンバスを画架からとりはずすと、それを道ばたの草の上へいかにも投げやりに、乱暴なくらいにほうり出したところだった。ほうり出された大きなキャンバス



は、しかしひとりでにふんわりとなりながら、草の上へ倒れて行った。それを見ると、私は彼女のそばへ駆けつけた。

「僕が持つていて上げよう」

「いいわ……いつもひとりでするんですから」

「意地わるー！」

「意地わるでしょう」

私は彼女とそんな風に子供らしく言い合いながら、無理にキャンバスを引つたくると、それを自分の肩にあてがいながら、彼女と並んで村の街道を宿屋の方へと歩いて行った。ときおり私たちは散歩をしている西洋人や村の子供たちとすれちがった。彼等のもの珍らしそうな視線は私たちを——殊にまだこの村に慣れない彼女を気づまりにさせているらしかった。私は私で、そういう彼女をつとめて気軽にさせようと思つて、私の空いている方の手を自分の肩の上へやりながら、

「ほら、こんな穴が出来ちやつた……さつき一人で散歩しているとき野薔薇にひっかかったのさ」

そう言つて、その肩の穴がもつと大きくなるのも構わずに、それをよく彼女に見せよう

として、自分のジャケットを引張って見せたりした。そうして私はこんなにまで私と打ち解け合ひだしているこの少女を振り棄てて、自分ひとりこの村を立ち去るなんぞということは、到底出来そうもないと考え出していた。

私の「美しい村」は予定よりだいぶ遅れて、或る日のこと、漸つと脱稿した。すでに七月も半ばを過ぎていた。そうして私はそれを書き上げ次第、この村から出発するつもりであったのに、私はなおも、そういう一人の少女のために、一日一日と私の出発を延ばしながら、私とその物語の背景に使った、季節前の、気味悪いくらいにひっそりした高原の村が、次第次第に夏の季節シイズンにはいり、それと同時にこの村にもぼつぼつと避暑客ひしよきやくたちが這入り込んでくるのを、私は何んだか胸をしめつけられるような気持で、目のあたりに迎えていた。

私はしばしばその少女と連れ立って、夕食後など、宿の裏の、西洋人の別荘べつそうの多い水車の道のあたりを散歩するようになっていた。そんな散歩中、ときおり、一月前までは

私と一しよに遊び戯れたりしたことさえある村の子供たちと出会うようなこともあったが、彼等は私たちの傍を素知らぬ顔をして通り抜けていった。もう私を覚えていないのだろうか、それとも私がそんな見知らない少女と二人づれなのを異様に思つてそうするのだろうか？ ……しかしそれらの子供たちも、そのうちだんだんに、そんな林の中で最初のうちは私たちのよく見かけたものだつた、さまざまな小鳥などと共に、その姿をほとんど見せないようになつた。そしてその代り、私たちとすれちがひながら、私たちに好奇的な眼ざしを投げてゆく、散歩中の人々や、自転車に乗つた人々などがだんだんに増えて来た。それらの中には私と顔見知りの人たちなども雑つていた。私はいつかこんなところをひよつくり昔の女友達にでも出会いはしないかと一人で氣を揉んでいたが、ときどき、そんな散歩の途中に、ふと向うからやってくる人々のうちに遠見がどこそれらに似たような人があつたりすると、私は慌てて、その人たちを避けるために、道もないような草の茂みのなかへ彼女を引つ張りこんで、何んにも知らない彼女を駭かせるようなこともあつた。

そんな風に、私は彼女と暮方近い林のなかを歩きながら、まだ私が彼女を知らなかつた頃、一人でそこいらをあてもなく散歩をしていたときは、あんなにも私の愛していた瑞西式のバンガロオだの、美しい灌木だの、羊齒だのを、彼女に指して見せながら、私はな

んだか不思議な気がした。それ等のものが今ではもう私には魅力みりよくもなんにも無くなってしまうていたからだ。そうして私は彼女の手前、それ等のものを今でも愛しているように見せかけるのに一種の努力をさえしななければならなかった。それほど、私自身は私のそばにいる彼女のことで一ぱいになってしまっているのだった。……そうしてそんな薄うすぐらい道ばたなどで、私は私の方に身をもた寄せかけてそれ等のものをよく見ようとしている彼女のしなやかな肩へじつと目を注ぎながら、そつとその肩へ私の手をかけても彼女はそれを決して拒こぼみはしないだろうと思つた。そして私は或ある時などは、その肩へさりげないように私の手をかけようとして、彼女の方へ私の上半身を傾かたむけかけた。私の心臓は急にどきどきしだした。が、それよりもつとはげしく彼女の心臓が鼓動こどうしているのを、その瞬間、私は耳にした。そしてそれが私に、そういう愛撫あいぶを、ほんのそのデッサンだけで終らせた。……私はまだその本物を知らないのだけれど、それが与えるのとちつとも異ちがわないような特異ユニークな快さを、そのデッサンだけでもう充じゅうぶん分に味あじわつたように思いながら。

一体、「水車の道」というのは、郵便局やいろんな食料品店などのある本通りの南側を、それと殆んど平行しながら通っているのだが、それらの二つの平行線を斜かに切っている、いくつかの狭い横町があった。そんな横町の一つに、その村で有名な二軒の花屋があった。二軒とも藁屋根の小さな家だったが、共に、その家の五六倍ぐらいはあるような、大きな立派な花畑に取り囲まれていた。そしてその二つの花畑を区切って、いつも気持のよいせせらぎの音を立てながら流れているのは、数年前まで、そのずっと上流のところまでごとごとと古い水車を廻転させていたところの、あの小さな流れであった。そしてその一方の花畑などは、水車の道を越して、更らにその道の向うまで氾濫していた。……つい先頃までは、あんなに何処もかしこも花だらけであったこの村では、この二軒の花屋は、ほとんどその存在さえ人々から忘れられていた位であったが、やがてその季節が過ぎ、これらの野生の花がすっかり散って、それと入れ代りに今度は、これらの畑で人工的に育て上げられた、さまざまな珍しい花が、一どにどつと咲き出したものだから、その横町を通り抜ける者は誰しもその美しい花畑に眸をみはらないものは無いくらいであった。だが、その二軒並んだ花屋の前を通りすかりに、注意をしてそれらの店の奥に坐っている花屋の主人たちに目を止めた者は、一層の愕きのためにその眸をもっと大きくせずにはいられな

かつたであろう。と言うのは、その一方の店の奥にきよとんと坐っている白い碁盤縞のシャツを着た小柄な老人を認めたと、次の花屋の前にさしかかると、何んとその奥にも、つい今しがたもう一方の奥に見かけたばかりのと寸分も異なる、小柄な老人が、やはり同じような白い碁盤縞のシャツを着て、きよとんと腰をかけ、往来の方を眺めているのに気づくだらうからだ。ただ異うのは、そんな二人のそばに坐っているのが、一方はいつも髪をくしやくしやくにさせた、肥つちよの女房であつたし、もう一方はそれと好対照をしている位に痩せつぼちの、すこし藪覗みらしい女房であることだ。つまり、その二軒の花屋の老いたる主人たちは、ほとんど瓜二つと云つていいほどの、兄弟なのであつた。その上、可笑しいことには、この花屋の兄弟はとても仲が悪くて、夏場だけはお互に仲好さそうに口を利き合いながら商売をしているが、さて夏場が過ぎてしまうと、すぐに性懲りもなく喧嘩をし始め、冬の間などは、お互に一言も口を利かずに過ぎすようなこととさえあると言うことだつた。——そんな風変りな二軒の花屋のある横町には、道ばたに数本の小さな櫛と楓とが植えられてあつたが、その一番手前の小さな楓の木に、ついこの間のこと、「売物モミ二本、カエデ三本」という真新しい木札がぶらさげられた。そしていまや、その横町の両側の花畑には、向日葵だの、ダリヤだの、その他さまざまの珍らし

い花が真つきかりであった。……

私はそんな二軒の花屋の物語を彼女に聞かせながら、その私の大好きな横町へ、彼女の注意を向けさせた。

水車の道の上へ大きな枝を<sup>ひろ</sup>拵げている、一本の古い桜<sup>さくら</sup>の木の根元から、その道から一段低くなっている花畑の向うに、店の名前を羅馬<sup>ローマ</sup>字で真白にくり抜いた、空色の看板が、さまざまな紅だの黄だの花とすれすれの高さに、しかしそれだけくつきりと<sup>う</sup>浮いて見えている。——そんな角度から見た一軒<sup>けん</sup>の花屋の屋根とその花畑を、彼女は或る日から五十号のキャンバスに<sup>えが</sup>描き出した……。

しかしその水車の道はそのへんの別荘の人たちが割合に<sup>ゆ</sup>往き来するので、彼女のまわりにはすぐ人だかりがして困るらしかったが、私は一遍<sup>べん</sup>もその絵を描いている場所へ近づこうとはしないでいた。そんな人目につき易<sup>やす</sup>い場所で私が彼女と親しもうにしているのを、私の顔見知りの人々に見られなくなかったからだ。で、私は自分の部屋に<sup>と</sup>閉じこもったきりで、この頃やつと書き上げたばかりの原稿へ最後の手入れをし続けていた。(しかし、その間一番余計に私の考えていたのは、やつぱり彼女のことであった。)——が、私はその花屋を描いているところを遠くからなりと、一度見て置きたいと思つて、或る朝、宿屋

の裏の坂を上りながら水車の道まで出て行って見た。そうして私は、その道の向うの、大きな桜の木の下に立って、パレットを動かしている彼女と、それから彼女の横からその画布を覗き込みながら、一人のベレ帽をかぶった若い男が、何やら彼女に話しかけているのを認めた。私はそんな男が早く彼女のそばを立ち去ってくればいいにと、すこしやきもきしながら、待つていた。――

「誰れ？　いまの人……」やつとその男が立ち去つたのを見ると、私は急いで彼女の方へ近づいて行きながら、いかにも何気なさそうに訊いた。

「画家さんなんですって……何んだか、あんまり何時までも見ていらつしやるんで、私、厭になつちやつた……」

彼女はわざとらしく顔をしかめて見せた。それからすこし恐いような眼つきをして花畑の一部を見つめだした。熱心に絵を描こうとしているときの彼女が、こんな男のような、きびしい眼つきになるのを私はよく知っていたものだから、私はそれつきり黙っていた……

そんな風に、私がちよつとでも彼女から離れている間に、私なしに、彼女がこの村で一人きりで知り出しているすべてのものが、私に漠として不安を与えるのだった。或る日、



彼女は、昔は其処そこに水車場があつたと私の教えた場所のほとりで、屢しばしば、背中から花はな籠かごを下ろして、松葉杖まつばづえに靠もたれたまま汗あせを拭ふいている、跛ちんばの花売りを見かけることを私に話した。彼女の話すようなものをついぞ見かけたことのない私には、そんな跛の花売りのようなものと彼女が屢しば出会うことすら、自分でも可笑おかしいくらい、気になつてならなかつた。

或る朝、私は私の窓から彼女が絵具箱をぶらさげて、裏の坂を昇のぼつてゆくのを見送つた後、そのまんまぼんやり窓にもたれていると、しばらくしてからその同じ坂を、花籠を背負い、小さな帽子をかぶつた男が、ぴよこんぴよこんと跳はねるような恰かつこう好こうをして昇つてゆくのが認められた。よく見ると、その男は松葉杖をついているのだ。ああ、こいつだな、彼女がモデルにして描きたいと言つていた跛の花売りというのは！ ……そういう後姿だけではよくわからなかつたが、その男は、この村の花売り共が太たい概がいよぼよぼの老人ばかりなのに、まだうら若い男らしかつた。それが一層片輪の故にそんな花売りなんかしてい

ることを物哀ものあわれに感じさせた。——そうして、その悲しげな跛の花売りを、私は自分自身の眼で見知るや否いなや、彼女がその姿を絵に描いてみたいと言っていただけでもって、その跛の花売りに私の抱いだいていた、軽い嫉妬しつとのようなものは、跡あと方もなく消え去った。：

しかし、数日前水車の道で彼女に親しげに話しかけていたところを私の目撃もくげきした、あの画家だという、ベレ帽をかぶっていた青年は、その顔なんか明瞭めいりょうには覚えていなかったが、それだけ一層、その男の漠とした存在は、何かしら私を不安にさせずにはおかなかった。彼女はその画家のことはそれつきり何んにも私に話さなかったが、ひよつとしたら彼女はそれまでに何遍もその画家に出会っており、そして私の知らない間に互に親しくなりだしているのではないかと云うような懸念けんねんさえ私は持ちはじめていた。そうして或る日のこと、そういう私の懸念を一そう増けさせずにはおかないような出会いを私たちはその画家としたのだった。——やつと彼女が花屋の絵を描き上げたので、次の絵を描く場所を捜さがすために、或る晴れた朝、私は彼女と一いっしょ緒に、すこし遠いけれど、サナトリウムの方へひさしぶりで出かけてみることにした。私たちが、小さな集りのあるらしい、少人数の西洋人の姿が窓ごしにちらちら見える、教会の前を通りぬけて、その裏の、いつも人ひと気けの

ない橡とちの林の中へはいろいろとした途端とたん、私たちの行く手の、その林のなかの小径こみちをば、一人ひとりの男が、帽子もかぶらずに、スケッチ・ブックらしいものを手にしながら、ぶらぶらしているのを私たちは認めた。「いつかの画家さんよ……又また、お会いしたわ」——彼女かのじょにそう注意をされるまでは、私はその男が、この頃何ごろの理由もなく私を苦しめ出している、そのベレ帽の画家と同じ男であることには気づかなかった位であった。それほど私はその画家については何んにも見覚えがなかったのだ。私は、私たちの方へぶらぶら歩いてくるその男からは、つとめて私の視線をはずしながら、急に早口にとりとめもないことを彼女に話し出した。私は彼女が私の話に氣をとられてその男の方へはあんまり注意しないようにと仕掛しかけたのだ。しかし彼女は私の言うことには何んだか氣がなさそうに応こたえるだけであつた。そして彼女は、私がそばにるのでひどく曖昧あいまいにされたような好意こゝろに充みちた眼ざしで、その男の方を見つめていた。少くとも私にはそんな氣がした。すると、その男の方でも、私の知らないこの前の出会いの際に、彼女と交こうかん換かんした親しげな視線の続きとも言つたような意味ありげな視線を彼女の方へ投げかけながら、そして思い出し笑いのよなものをふいと浮べながら、軽く会えしやく釈やくをして、私たちのそばを通り抜けて行つた。

私はなんだか急に考えごとでもし出したかのように黙り込んだ。私たちはその橡とちの林を

通り抜けて、いつか小さな美しい流れに沿い出していた。しかし私はいま自分の感じていることが何処まで真実であるのか、そんなことはみんな根も葉もないことなんじゃないかと疑ったりしながら、気むずかしそうに沈黙したまま、自分の足許ばかり見て歩いていた。そうして私は、そんな自分の疑いに対するはつきりした答えを恐れるかのように、いつまでも彼女の方を見ようとはしないでいた。が、とうとう私は我慢し切れなくなつてそんな沈黙の中からそつと彼女の横顔を見上げた。そして私は思ったよりももつと彼女がその沈黙に苦しんでいるらしいのを見抜いた。そういう彼女の打ち萎れたような様子は私にはたまらないほどいじらしく見えた。突然、後悔のようなもので私の胸は一ぱいになつた。……私がほとんど夢中で彼女の腕をつかまえたのは、そんなこんがらがつた気持の中でだつた。彼女はちよつと私に抵抗しかけたが、とうとうその腕を私の腕のなかに切なそうに任せた。……それから数分経つてから初めて、私はやつと自分の腕の中に彼女がいることに気がついたように、何んともかんとも言えない歓ばしきを感じ出した。

私たちは、少しぎごちなさそうに腕を組んだまま、例の小さな木橋を渡つた。それからその流れの反対の側に沿つて、サナトリウムへの道に這入つて行つた。その途中にずっと続いている野薔薇の生垣は、既にその白い小さな花をことごとく失つた跡だつた。そん

な葉ばかりになつてしまつている野薔薇の茂みは、それらが花を一ぱいつけていた頃のことを、殆んど強制的に私に思い出させはしたけれど、私はそれがどんなになつていようとも、もうそれには少しも感動できなくなつていた。それほどあの頃からすべてが變つていた。そしてそれが何もかも自分の責任のような気がされて、私はふつと気が鬱いだ。……が、それらの生墻の間からサナトリウムの赤い建物が見えだすと、私は気を取り直して、黄いろいフランス菊がいまを盛りに咲きみだれている中庭のずつと向うにある、その日光室を彼女に指して見せた。丁度、その日光室の中には快癒期の患者らしい外国人が一人、籐椅子に靠れていたが、それがひよいと上半身を起して、私たちの方をもの憂げな眼ざしで眺め出した。——それから私たちは、なおもその流れに沿つて、そこいらへんから次第にアカシアの木立に縁どられだす川沿いの道を、何処までも真直に進んで行つた。それらのアカシアの花ざかりだった頃は、その道はあんなにも足触りが軟かで、新鮮な感じがしていたのに、今はもう、あちこちに凸凹ができ、汚らしくなり、何んだかいやな臭いさえしていた。その上、それらのアカシアの木立は、まだみんな小さいので、はげしい日光から私たちを充分に庇うことが出来ないで、その川沿いの道はそれまでの道よりも一層暑いように思えた。私たちは途中からそれらのアカシアの間をくぐり抜け

て、丁度サナトリウムの裏手にあたる、一面に葦よしの這よじっている、いくぶん荒涼こうりようとした感じのする大きな空地へ出た。其処そこからは、村の峠とうげが、そのまわりの数箇すうこの小山に囲繞いりょうされながら、私たちの殆んど真向うに聳そびえていた。——梅雨期ばいうきには、その頃の私自身の心の状態のせいだったかも知れないが、その奥には何かしら神秘的なものがあるように思えてならなかった。その峠も、いまは何物をも燃やさずにはおかないような夏の光線を全身に浴びながら、何んだか炎ほのおのようにゆらめいているような感じで、私たちに迫せまっていた。

……

彼女は、その燃ゆるような山なみを、サナトリウムの赤い屋根を前景に配置しながら、描いてみたいと言った。そしてそれを適当な角度から描くために、そんなはげしい光線の直射するのにも無頓著むとんじやくのように、その空地のやや小高いところを選ぶと、三脚台さんきやくだいを据すえて、その上へ腰かけ、斜めななにかぶった運動帽の下からときどきまぶしそうな顔を持ち上げながら、その下図をとりだした。……私は彼女の仕事の邪魔じやまにならないように、いつものように彼女を其処に一人きり残しながら、再びさっきの土手に出て、やや大きなアカシアの木蔭こかげを選んで、そこに腰を下ろしていた。そうして私の前の小さな流れの縁を一羽の鶺鴒せきれいが寂さびしそうにあっちこっち飛び歩いているのにぼんやり見入っていると、突然、

私の背後のサナトリウムの方からその土手をうんうん言いながら重たそうに荷車を引いてくる者があるので、私は道をあげようとして立ち上った。見ると、それは一台の塵芥車ごみぐるまだった。私は、とんでもないものがこんなところを通るんだなあと思いつながら、道ばたの灌木かんぼくの中へすつぽりと身体からだを入れながら、よそつぽを向いていた。が、その塵芥車がやつと私の背後を通り過ぎたらしいので何気なくなにげちらりとそれへ目をやると、その箱車のなかに、罐詰かんづめの罐やら、唐とうもろこしの皮やら、英字新聞の黄ばんだのやら、草花の枯れかたのやらが、一種汚らしい美しさで、ぎつしりと詰つまっていた。そしてその車の通った跡には、いつまでも腐くさった果物に似た匂においが漂ただよっていた。……私はこんな塵芥車のようなものにも、いかにもこの外国人の多い村らしい独得な美しさのあるのを面白おもしろがって、それをちよつと見送った後、再びさっきのアカシアの木蔭へぼんやり腰を下ろしていると、ものの数分と経たないうちに、私はまたしても私の背後へ近づいてくる車の音でもって、立ち上らなければならなかった。それもまた、前のとそっくり同じような、塵芥車だった。そしてそれから小一時間ばかりの間に、私はこの土手を通りすぎる同じような塵芥車を、ほとんど十台ぐらい数えることが出来た。——何処かこの先きの方にも、きつとこの村の芥棄ごみすて場があるんだなど、それにはじめて気がつくや否いなや、私は漸やつとこのことで、この

サナトリウムの土手がこんなに凸凹になり、汚らしくなっている原因にも気がつきだした。そうしてそれとほとんど一緒に、もうこんなにかの村には沢山たくさんの外国人がはいり込んでいるのかなあと思いながら、私はすこし呆気あっけにとられたように、いましがた私の背後を通り過ぎて行ったばかりの、その最後の塵芥車ごみぐるまをいつまでも見送っていた。……



## 暗い道

「どっちへ向いて行くんだか、私にはちつとも分らないわ」彼女はいくらか上<sup>うわ</sup>ずったような声で言った。

「実は僕にも分らなくなっちゃったのさ……」私はそう返事をしながら、彼女の方を見やしたが、その白い顔の輪<sup>りんかく</sup>廓がもうほとんど見分けられないくらいの暗さになりだしていた。実際私自身にもこんな風に私たちの歩いている山<sup>やまみち</sup>径の見当がちよつと付きかねていたのだけれど、私はわざとそれを冗<sup>じょうだん</sup>談のように言い紛<sup>まぎ</sup>らわせていたのだった。

——その日、私が私の「美しい村」の物語の中に描<sup>えが</sup>いた、二人の老<sup>ろうじょう</sup>嬢たちのもど住まっていた、あの見<sup>み</sup>棄<sup>す</sup>てられた、古いヴィラの話<sup>はなし</sup>を彼女にして聞かせると、それをしきりに見たがったので、私自身はもうそんなものは見たくもなかったのだけれど、その荒<sup>あ</sup>れ果てたヴェランダから夕暮<sup>ゆうぐ</sup>れの眺めがいかに美しくかったのを思い出して、夕食後、ともかくもそのヴィラまで登<sup>のぼ</sup>って行<sup>い</sup>つてみることにした。恐らくあの家はまだあのまんまになっているだろうと予想しながら。……が、だんだんそのヴィラが近づいてくるにつれ、私は

何んだか急にそんな自分の夢の残骸のようなものを見に行くのが厭な気がし出したので、そろそろ日が暮れかけて来たのをいい口実に、まだ山径がこれからなかなか大へんだからと言って、私たちはその途中から引返すことにした。——その帰り途、私はその代りに、まだ彼女が知らないというベルヴェエルの丘の方へ彼女を案内するため、いましがた登ってきたのとは異った山径を選んでいるうちに、どう道を間違えたのか、そのへんからもう下り道になってもよさそうな時分なのに、いつまでもそれが爪先き上りになっっていて、私たちはその村の中心からはますます反対の方へ向いつつあるような気がしてきた。まだこの村にこんな私の知らない部分があることを心のうちでは驚きながら、しかし私はそのへんをいかにも知り抜いているように装いながら、さっさと彼女を導いて行った。が、私たちはともすると無言になるのだった。……いつのまにやらもうすっかり日が暮れていた。私たちの歩いている道の両側の落葉松などが伸び切つて、すこし立て込んでいたりすると、私はほとんど彼女の着ているワンピースの薔薇色さえ見さだめがたい位であった。ただときどき彼女の肩が私の肩にぶつかるので、自分の傍に彼女を近ぢかかと感じながら歩いていった。そうかと思うと、木立の間からだしぬけにその奥にあるヴィラの灯りが下枝ごしに私たちの肩に落ちて来て、知らず識らずに身をすり寄せていた私たちを思わず離れさせた。

——そんなヴィラの数がだんだん増え出して来たらしいことが、いくらか私たちをほっとさせていた。……

突然、私は心臓をしめつけられたように立ち止まった。私はそれらのヴィラに見覚えがあり出すのと同時に、これをこのまま行けば、私がこの日頃そこに近寄るのを努めて避けるようにしていた、私の昔の女友達の別荘の前を通らなければならぬことを認めたのだ。そして私は、その一家のものが二三日前からこの村に来ていることを宿の爺やから聞いて知っていたのだ。しかしもうさんざん彼女を引つ張りまわした拳句だったし、私もかなり歩き疲れていたので、この上廻り道をする気にはなれずに、私は心ならずもその別荘の前を通り抜けて行くことにした。……だんだんその別荘が近づいて来るにつれ、私はますます心臓をしめつけられるような息苦しさを覚えたが、さて、いよいよその別荘の真白な柵が私たちの前に現われた瞬間には、その柵の中の灯りの一ぱいに落ちている芝生の向うに、すっかり開け放した窓枠の中から、私の見覚えのある古い円卓子の一部が見え、その上には、人々が食事から立ち去ってからまだ間もないと言ったように、丸められたナプキンだの、果物の皮の残っている皿だの、珈琲茶碗だのが、まだ片づけられずに散らかったまま、まぶしいくらい洋燈の光りを浴びてきらきらと光っているのを、

私は自分でも意外なくらいな冷静さをもって認めることが出来た。いい具合ぐあいに其処そこには誰だれも居合わさなかつたせいか、それともまたそれは、その瞬間までに、私のなかの不安が、既にその絶頂を通り越こしてしまつていたせいであつたらうか？　ともかくも、私はかなり平静に近い気持で、ただちよつと足を早めたきりで、その白い柵の前を通り過ぎることが出来た。……そんな私の心のなかの動揺どうようには気づこう筈はずがなく、彼女は急に早足になつた私のあとから、何んだか怪訝けげんそうについて来ながら、

「まだ、なかなか？」とすこし不安らしく私に声をかけた。

「うん……ますます見当がつかないんだ」

「そんなことばかり言つて……」彼女はそんな私の本気とも冗談ともつかないような態度にとうとう腹を立てたように見える。そうしてそんな私を非難くちがぶりするような口吻くちがぶりで、

「早く帰らない？」と言つた。

「じゃ、一人でお帰りなさい」と私はいまはもう微笑びしょうらしいものさえ浮うかべながら返事へんじをした。

「意地わる!」

「だって、ほら、其処知しっているでしょう？」と私は、私たちの行く手の暗がりの中に小

さなせせらぎが音立てているのを指しながら、「水車の道じゃないの？」と快活そうに言った。「まあ、本当に……」と彼女はまだ何んだかそれが信じられないと言った風に自分の周囲を見廻わしていた。私たちはすでに、林のなかを抜け出して、昔、水車場のあつた跡に佇たずんでいたのだった。——そこで道が二ふた股またに分かれて、一方は「水車の道」、もう一方は「本通り」へと通じていた。どつちからでも、もうすぐ其処の宿屋へは帰れるのだが、水車の道の方からだと例のかなり峻けしい坂道を下りなければならなかつたので、私たちは本通りの方から帰ることにした。で、その後者の道をとって、その突つきあたりから本通りの方へ曲ろうとした途端とたんに、私は、その本通りの入口の、ちようど宿屋の前あたりから、ぽうつと薄明うすあかるくなりだしている圈わの中に、五、六人、一かたまりになった人影ひとかげがこちらを向いて歩いてくるのを認めた。私はどきつとして立ち止まった。どうやらそれが私の昔の女友達どもらしく見えたからだ。……私は急に、私のそばにいる彼女の腕をとって、向うから苦手の人が来るらしいので捕つかまると面めん倒とうくさいからと早口に言い訳わけしながら、いま来たばかりの水車場の方へ引つ返していった。そうして再びさっきの小川の縁ふちに並ならんで立ちながら、その人達がそのまま本通りの方から来るか、それとも宿屋の裏の坂を抜けてくるか、どつちから来るだろうと、両方の道へ注意を配っていた。……そしてそつ

ちにばかり注意を奪うばわれていたので、私たちは、私たちの背後の、いましがた其処から私たちの出てきたばかりの林の中から、数人のものが懐かい中電ちゆうでん氣を照らしながら、出てくるのには全然気がつかずにいた。突とつ然ぜん私たちはその懐中電氣のまぶしい光りを浴びせられた。私たちはびつくりしてその小川の縁を離はなれた。……しかし懐中電氣を手にしていた男の方でも、そんなところに思いがけず私たちが突つ立っていたのに、面喰めんくらったらしかったが、その一人が私だと気がつくつと、

「××君じゃない？」と私の名前をためらいがちに言った。そう言われて、私が一層驚いて、まぶしそうに顔をしかめながら振り向いて見ると、それは私の学生時代からの友人であった。それと同時に、私はその友人の背後に、若い女たちが二三人、まだ不審ふしんそうに聞やみを透すかしながらこちらを見つめているのに気がついた。それはその友人の若い妻君や妹たちであった。私は彼女たちにちよいと会え釈しゃくをして、それから気まり悪そうに微笑しながら、

「なあんだ、君たちか！——何時いつ、こつちへ来たの？」

「昨日来た。さつき君のところへ寄つたら留守だと言うんで、それから細木さんのところへ行つて見たんだ。あそこの家もみんな出払ではらつていているんだ……」

私はその友人の言葉を聞き終えるか終えないうちに、本通りの方の曲り角から一かたまりの人影がこつちへ曲つて来だしたのを認めた。

「じゃあ、構わないから、僕ぼくんところへ寄つて行けよ」

そう言い棄てて、私はさつきと一人で水車の道の方へ歩き出した。そうして私は二三のヴィラの前を通り過ぎてから、その先きの、真つ暗だけれど、私には勝手の知れた、草ぶかい坂道をずんずん一人先きに降りていった。やがて他の連中も、そんな私の後からひとつか塊たまたりになつて、一箇この懐中電気を頼たよりにしながら、きやつきやつと言つて降りて来た。

……

「まあ、こんな道あるの、私、ちつとも知らなかつたわ」

坂の途中で、友人の若い妻君がそんなことを誰にともなく言つたらしいのが、もうその時はその小さな坂を降り切つてしまつていた私のところまで、手にとるように聞えて来た。私は丁度、その友人の妻君も確か数年前にその坂道で私の出会つた少女たちの中に雑まじつていたことを思い出すともなく思い出していたところだった。——その出会いは私にはあんなにも印象深いのに、嘗かつてのその少女たちの一人であつた彼女かのじよの方では、（恐おそらく他の少女たちも同様に）そんな私との出会いのことなどは少しも気に留めていないで、すつ

かり忘れてしまっているのかなあと思った。が、一方ではまた何んだか、そんなことを言  
つて彼女が私をからかっているのじゃないかしら、とそんな気もされた。ひよいと彼女の  
口を衝いて出たらしいそんな言葉を私はひとりで気にしながら、いつまでもそつぽを向い  
て皆の降りてくるのを待っていると、突然、そのうちの誰かが足を滑らして、「あつ！」  
と小さく叫んで、坂の中途にどさりと倒れたらしい気配がした。見上げると、その坂の中  
途にまだ転がっているらしいものがまるで花ざかりの灌木のように見えた。そして他の  
ものがみんな立ち止まって、その一番最後に降りてきた少女の方をふり返っているのを、  
私はただぼかんとして眺めながら、その場を一步も動こうとしないで突っ立っていた。そ  
うして私は毎朝のようにこの坂を昇り降りしているあの跛の花売りのことをひよつくり思  
い浮べ、あいつはまた何だつてこんなあぶなつかしい坂道をわざわざ選んで通るのだらう  
かしらと、全然いまの場合とは何んの関係もないようなことを考え出していた。……



## 青空文庫情報

底本：「風立ちぬ・美しい村」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年1月25日発行

1987（昭和62）年5月20日89刷改版

1987（昭和62）年9月10日90刷

初出：序曲「大阪朝日新聞」（「山からの手紙」の表題で。）

1933（昭和8）年6月25日

美つゝ村「改造」

1933（昭和8）年10月号

夏「文藝春秋」

1933（昭和8）年10月号

暗く道「週刊朝日 第25巻第13号」

1934（昭和9）年3月18日号

初収単行本：「美つゝ村」野田書房

1934（昭和9）年4月20日

※「二股《ふたまた》」と「二又《ふたまた》」の混在は、底本通りです。

※初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）年5月28日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

2014年8月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 美しい村

堀辰雄

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>